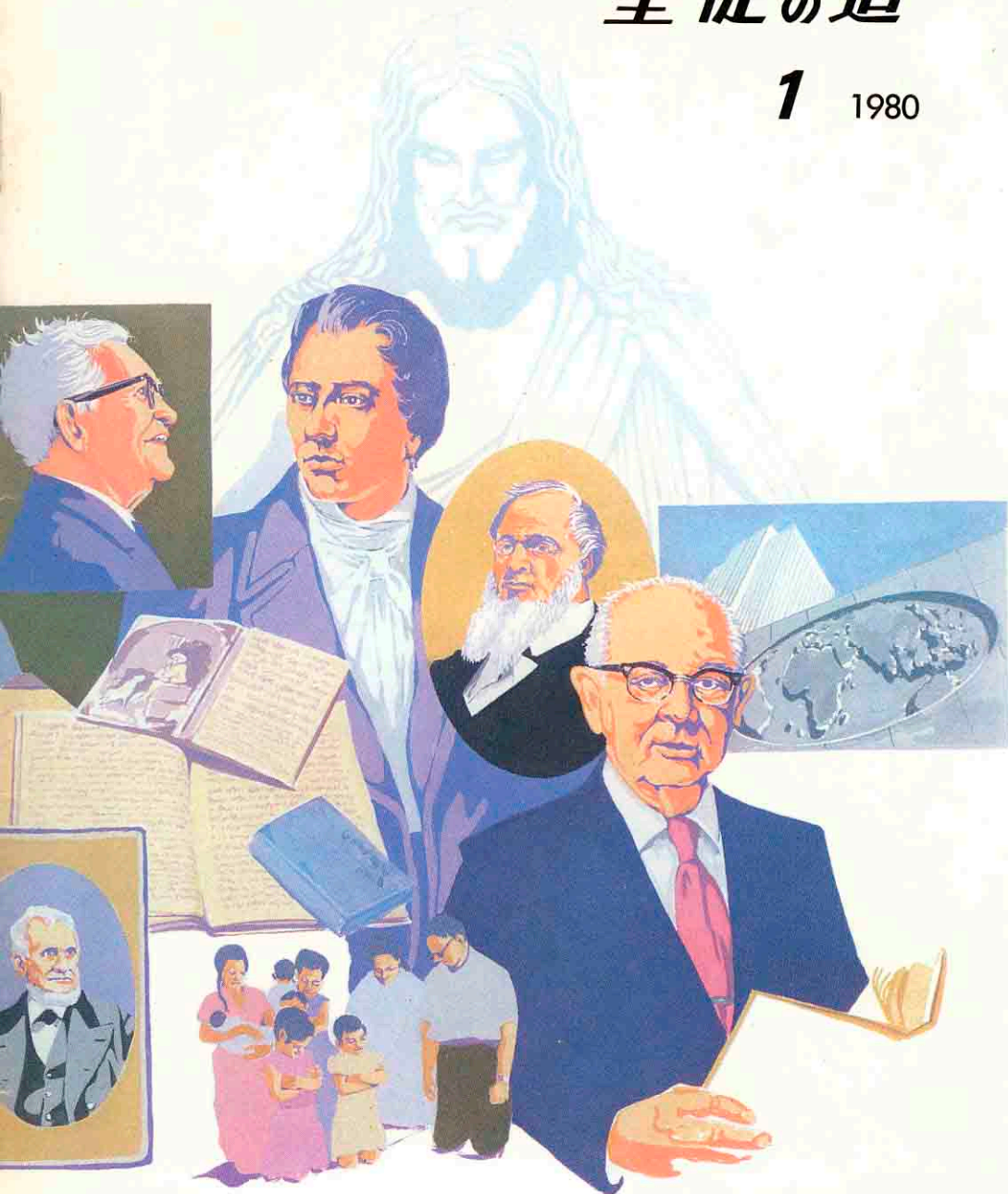
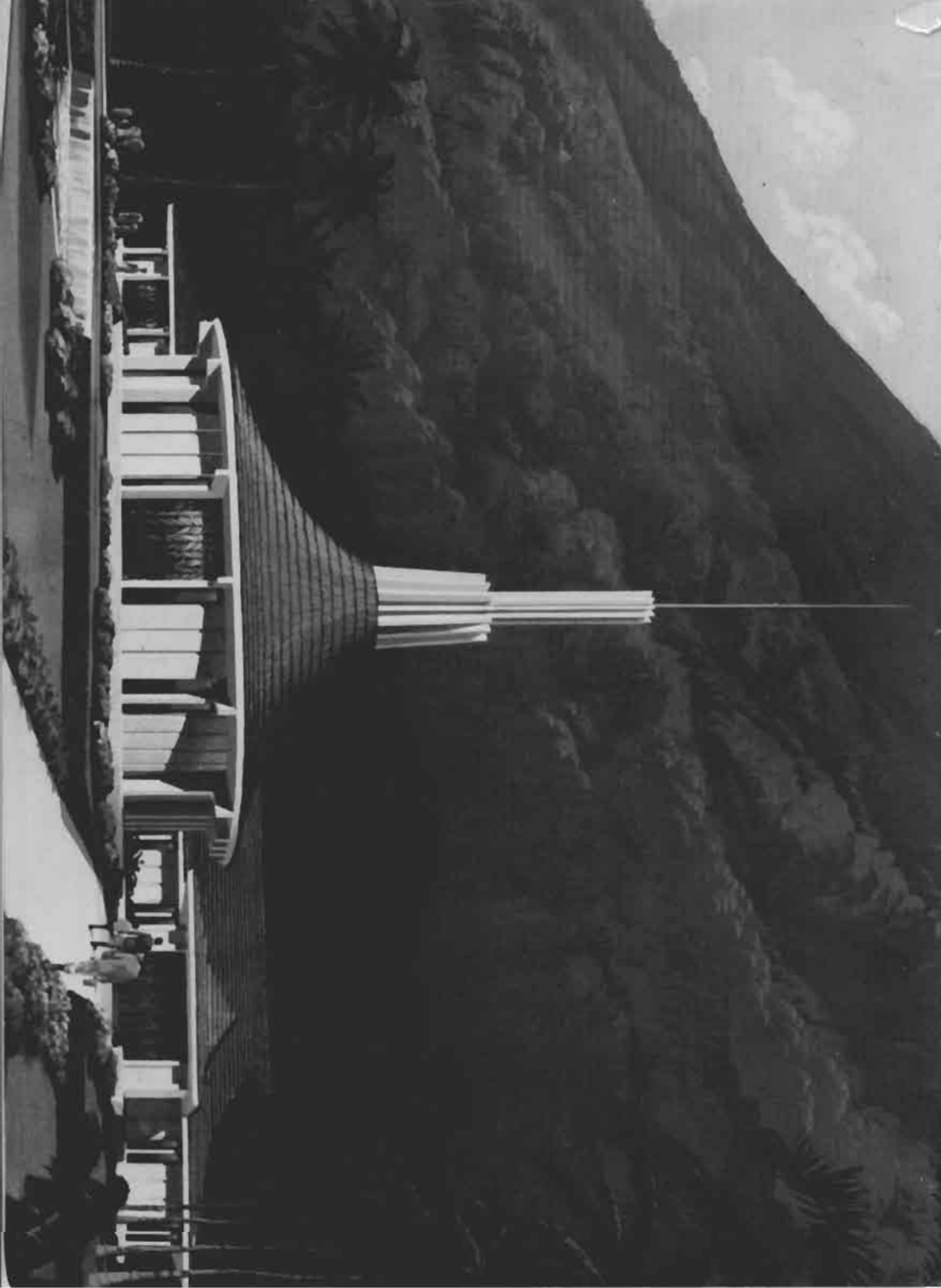
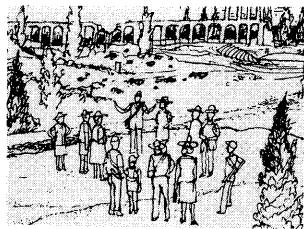
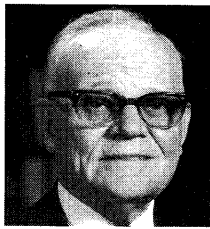


# 聖徒の道

1 1980







末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
リグランド・リチャーズ  
ハワード・W・ハンター  
ゴードン・B・ヒンクレー  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・パッカー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ペリー  
デビッド・B・ヘイト  
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア  
レックス・D・ピネガー  
チャールズ・A・ディディエ  
ジョージ・P・リー

国際機関誌

編集人：M・ラッセル・バラード  
ジュニア  
編集主幹：ラリー・A・ヒラー  
編集副主幹：キャロル・D・ラーセン  
子供の頁編集：コニー・  
ウィルコックス  
デザイナー：ロジャー・ギリング

「聖徒の道」

赤松成次郎（翻訳部長）

（左の絵）サモア神殿予想図

も く じ

戒めに従って歩む	N・エルドン・タナー	2
主のみ声である教義と聖約	ニール・A・マックスウェル	4
質疑応答	ロイ・W・ドクシー	8
「規則に規則を」	ジェームズ・B・アレン	10
与えられるのは石でしょうか、 パンでしょうか	フランシス・ベニオン	16
主はそなたも	ジェacob・ハン布林	20
学ぶことをやめてはなりません	マリオン・D・ハンクス	23
ホームティチャーの力	H・ブルース・ホーマン	25
小さなお友だちへ	マリオン・G・ロムニー	27
流れぼし	アイリス・シンダガード	29
わたくしのお友だちレナ	ジェニファー・R・グラント	33
おもちゃばこ		34
ほけつのピッチャー		36
聖書を読みましょう	スペンサー・W・キンボール	38
私の映画	ダン・リンドストーム	36
最高の奉仕	クリス・J・ヘンダーソン	38
評議所の宣教師	カーク・P・ラベンベリー	44
経験のない分野に飛び出してみ て初めて人には進歩があるのだ	ロイデン・G・デリック	46
指導の基本：個人への関心	ウィリアム・G・ダイヤー	49
ウイニー先生	R・ブルース・リンジー	52
指導者に従う	ボイド・K・パッカー	53
ローカル・ニュース		59

聖徒の道 1月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布5-10-30

印刷所 株式会社 精興社

配送 東京ディストリビューション・センター  
東京都世田谷区上用賀4-9-19

定価 年間予約1,700円 1部150円  
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA061AJA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 <sup>まっぴつ</sup> 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京ディストリビューション・センター



## 大管長会メッセージ

第一副管長 N・エルドン・タナー

# 戒めに従って歩む

「およそこれらの言葉を憶えて守り且つ行い、この誠命に従って歩むすべての聖徒らは、そのへそに健康を受けその骨に髓を受けん。

また智恵と知識の大いなる宝まことに秘れたる宝を見出さん。

而して走れども疲れず、歩けども気を失うことなからん。

主なるわれ彼らに一つの約束を与う。すなわち、さつりくの天使はイスラエルの小児たちが如く、彼らを過ぎ越して屠ることなかるべし。」(教義と聖約89:18—21)

この約束は主が私たちに与えられた最も包括的な約束のひとつであり、この大いなる祝福を受けたいと望まない人はだれもいないであろう。私たちは、この約束を知恵の言葉と関連させて考えることが多いが、「この誠命に従って歩む」とはすべての戒めのことを含んでいると考えられなくもない。

それは少し解釈のし過ぎだと言う人もいるかも知れない。しかし確かに、従順の報いと不従順の結果もたらされる罰とを考えてみるならば、不幸になるよりは幸福でいた方がよいと、だれもがそう思うはずである。ところで私たちは、裁きや罰というものは、必ずしもすぐに自分の身に起こるわけではないし、もしかして受けずにすむかも知れないと考えて、戒めに従わず、世俗の楽しみや欲望を満足させるようなことをしていないだろうか。そして従順であれば受けられるはずの大いなる祝福や約束までも忘れてしまっていることがよくある。

私たちにとって、将来の不測の事態に対処できるように備えておくことは、非常に大切である。樂觀的に、かつ自信を持ってその時を待つことが肝要である。過ぎ去ったことやできなかったことをくよくよ考えたところで何も得られはしない。むしろ、私たちは今この瞬間から後、誤りを正し、悔い改め、そして戒めに従って歩むという決意をもって前進することを決心しなければならない。そうしてこそ、私たちは今以上に幸福になり、愛し尊敬される人となり、努力を傾注するどの分野でも成功を収められるのである。

過去を振り返るということは、過ちは犯していないか、改めるべき点はないかということについて考えることである。過去の実績に満足するようになった時は、すでに墮落の道を歩み始めているのである。私たちは進歩するか退歩するかのどちらかである。高く組んだ足場から、降りては仕事の出来映えを眺めるれんが工のような、同じ過ちはしないようにしようではないか。

ところで、昔のことを回顧する時は、次のように自問してみるとよい。当然すべき進歩をしただろうか。目標を達成するために一生懸命努力しただろうか、と。もしよい答えが出せないようであれば、今この瞬間から一層の努力をしよう決心することである。私たちは、明確な計画の下に新しい目標を立て、その目標を達成するための手段を予め書き出しておく。そして、常に永遠の生命こそ私たちの究極の目的であることを肝に銘じておく。

福音は、この永遠の生命に至る唯一の道を

示してくれるものである。したがって、福音を受け入れる時がその人にとって新しい人生の始まりとなる。栄えある悔い改めの原則によって、私たちは新たに生まれ、罪が赦されたことを知ることができる。そして、約束された報いをもたらす完成に向かって努力の一步を踏み出すのである。私たちは、「悔い改めよ、しからずば決して天の王国に住むこと能わず」(アルマ5:51)と教えられている。

目標を立てるに当たっては、最終的な目標を考慮した上で、次に挙げる質問を十分自分に問うてみるとよい。

私はどのような人間か。

私はどのような人間になりたいと思っているか。

そのために現在何をしているか。そのような人間になるために妨げとなるようなことをしてはいないか。

どうすればそれを克服することができるか。

この点に関して、ジョセフ・F・スミス大管長は次のような勧告を与えている。

「先ず自分自身を制し、それからできるだけ私たちの周囲にある悪を征服して行こう。その時、私たちは暴力を用いてはならない。人々の自由意志を妨害しないでそれをしなければならぬ。私たちは、説教と、堅忍と、許しと、偽らざる愛によって、それをするのである。これらによって私たちは、人々の心をつかえ、神が私たちに啓示された真理に人の子らを導いて行くのである。唯一の真理の泉を見つけ、その泉の源から吸取するまで、決して平安も、正義も、真理も得られないだろ

う。」(「福音の教義」第1巻, p. 303)

「すべての人は、どんなに厳密な検査を受けても耐えられるような人格を持ち、公開された書物のようにだれもが手に取って見ることができ、しかもそれをけむたがったり、恥ずかしく思ったりすることがないようにならなければならない。教会で信頼され、高い地位についているすべての人は、何の欠点もなく、そして誰からも欠点を指摘されることのないようにならなければならない。また、悪いことをせず、誰からも悪いことをしたと非難されることのないようにしなければならない。さらに福音の原則に添って生活し、神のみたまや罪に打ち勝つ力のない単なる「弱い人間」にならずに、誰からもその欠点を「人間らしさ」とか「弱い人間」の証拠として指摘されることのないようにしなさい。神の王国で生活する者は皆こうでなければならない。」(「福音の教義」第1巻, pp. 301—303)

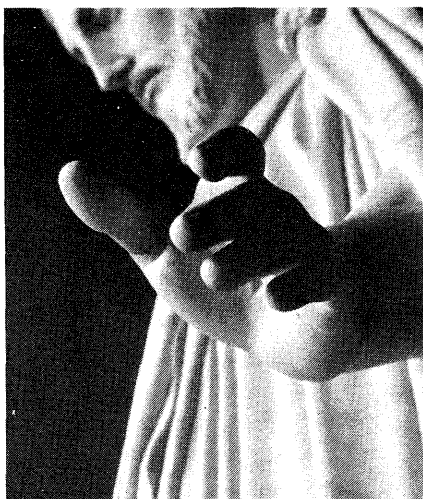
今こそその時である。私たち一人一人が、以前にも増してさらに善い行ないをしようと決心する時は、きょうであり、この時であり、今のこの瞬間である。

「すべての人は、この業が真実……であることを自分で知らなければならない。そして、『私は、私の宗教を身をもって実践します。…私は神のみ前にへりくだって歩み、人々と正直につき合います』と言えるようであればならない。」(ブリガム・ヤング, *Journal of Discourses* 「説教集」8:142)

一人一人の心と家庭の中に愛と平安が満ちあふれ、さらに幸福で明るい、意義ある将来を迎えることができるように。

# 主のみ声である 教義と聖約

七十人第一定員会会長  
ニール・A・マックスウェル



**聖**典の中で、主が語りかけられた言葉に直接、触れることができるのは、どの書物が一番多いだろうかと尋ねられたならば、ほとんどの人がまず新約聖書をあげるに違いない。確かに、新約聖書は救い主の行ないと教えを集めた素晴らしい書物である。しかし主イエス・キリストから直接に託された真理の宝を見いだすことができるのは、教義と聖約である。それはまさにキリストが実際に語りかけているかのごとく私たちの心に響いてくる。

次の啓示は1831年に与えられたものであるが、この啓示の言葉を読めば、だれでも心の奥底に主の威厳と力を感じずにはおられないであろう。

「主なる汝の神、すなわちイエス・キリスト、『われあり』と言ひし大いなる神、アルパにしてオメガ、始めにして終りなる神、とこしえの広大なる広がりを見、また世の創られざる前より天に於ける天使の大群をことごとく見たるその神、よろずのものわが眼の前にあれば、知らざる所なきその神汝に言う。われはわが言を出してこの世界を造り、またよろずのものわれによりて出で来りたる者なり。われは、エノクのシオンをわが懐に取りたる者なり。誠にわれ告ぐ、すべてわが名を信ずる者は皆、われはキリストなれば、わが名によりわが流せる血潮によりて御父の前に彼らの為にとりなしを為したり。」(教義と聖約38：1-4)

全能ではあるが人々のことをいつも心にかけられている神、イエス・キリストは教義と聖約の冒頭から万人にこう語りかけている。

「聴け、汝らわが教会の人々よ。いと高きところに住みて、すべての人を見まもる者の声

は告ぐ。曰く、誠いわにわれ告ぐ、汝ら民よ、遙かなる所より耳を傾けよ。海の島々にある者よ、共に聴け。」(教義と聖約1:1)さらに続けて主は「この末の世にわが選びたる弟子たちの口より、すべての人々に」及ぶ「警めの声」を「のがるる者」はひとりもないと宣言された。(教義と聖約1:2, 4 参照)

冒頭「聴け」という言葉に始まり、最後に「聴け」という言葉が用いられた次の聖句まで、主は繰り返し私たちに勧告しておられる。「さて、この故に聴け、汝らわが教会の人々よ。また汝ら長老も共に耳を傾けよ。汝らはわが王国を受けたり。汝ら努めてわが誠命をことごとく守るべし。汝らの上に審判下り、汝らの信仰は失せ、而して汝らの敵汝らを破らざらむためなり。さらば、今はこれを以て止む。アーメン、アーメン。」(教義と聖約136:41—42)

主は文字通り何百という聖句を他の比類することのない直接的な言葉で語りかけられたのであった。全知全能の主は、啓示の原則についてやさしくオリヴァ・カウドリに説いている。(教義と聖約9章参照)また私たちが理解できないほどの激しい苦痛を受けたナザレのイエスは、苦難の中にあるジョセフ・スミスを慰めてこう言われた。

「わが子よ、汝心安かれ。汝の不幸汝の困苦はただこれ束の間なり。」(教義と聖約121:7)

「地獄のあぎと大口開けて汝を呑まんとすとも、わが子よ汝この事を知れ、すなわちこれ皆汝に善からんため、汝に経験を与えんためのもなり、と。」(教義と聖約122:7)

こうしてみると、私たちはイエス・キリストを主としてだけでなく、永遠の友として愛

を感じずにはおられなくなってくる。

私たちの永遠の友であるイエスは、前途に横たわる様々な事柄について私たちの目を開いて下さる。もちろんその中には栄光の3段階という崇高な示現もあれば、懲らしめのためにその目が「落ちくぼむ」(教義と聖約29:19) ことなど主の再臨前に起こる最後の出来事のように怖れを抱かずにはおれないこともある。

さらに主は以前の予言を明確にしてこう述べておられる。「見よ、この言はわれまたエルサレムの滅亡に就きて正にその民に告げたる如く語るなり。この事のかつて今までに実証せられし如く、今またわが言は実証せらるべし。」(教義と聖約5:20)

救い主は宇宙の銀河系を探索し、同時にオリヴァ・カウドリの心の中を読み(教義と聖約6:22)、さらにはシドニー・リグドンの謀反の心を明らかにしておられる。「さて見よ、われ誠しんじつに汝らに告ぐ、主なるわれ今わが僕シドニー・リグドンを悦ばず。彼は慢心しんじんしていさめを容れずして『みたま』を悲しませたり。」(教義と聖約63:55)

このように多くの点で、教義と聖約は直接的な働きかけがあったということにおいて、主の指によって直接刻まれたあのシナイ山の2枚の板に並び称されるほどの近代の啓示である。(出エジプト31:18参照)このようにして直接に私たちに誓約を示しているだけでなく、誓約の一方の当事者である主について多くのことを教えている。モルモン経の原稿が紛失した話から、私たちは(失敗するのも自由であるという)人の自由意志と、ひとたび教訓を教えたならばすぐに新しい道を備えておられる愛にあふれる主の完全な思いとの間には

はっきりとした相互作用があることを知ることができる。(教義と聖約10章参照)

私たちはすべてを知り、すべての人々のことを思い、自分を信じる者を支援する救い主の姿を描くことができる。これはアルマが描いているルシフェルの姿とは全く対照的である。「このように私たちは主の道を曲げる者がどのような最後をとげるかを明らかに知り、また終りの日に当って悪魔は自分に仕えた者を助けずに速にこれを地獄に陥し入れることも知ることができるのである。」(アルマ30:60)

救い主はいつも予言者を励まし力づけておられる。しかし愛する僕ジョセフ・スミスに対して何ら手心を加えられることもなかった。「而して、われ今汝わが僕ジョセフに、悔改めをなしてわが前に一層まっすぐに道を歩き決してもはや人間のいぎないに負けぬ様に命ず。」(教義と聖約5:21)

主は初期の弟子たちに迫り来る殉教を告げられたと同じくして、予言者ジョセフ・スミスにも殉教する15年前に、もし堅固に戒めを守るなら「たとえ汝殺さるとも」永遠の生命を与えられるであろうと約束された。(教義と聖約5:22)

主は一對一で予言者ジョセフ・スミスに極めて個人的な啓示を与え、個人的に導いておられる。

「見よ、汝はわれに尋ねたればわれが誠に汝の悟りを開かしめしことを知る。われ今この事を語るは、真理の『みたま』によりて汝の悟れることを知らしめんためなり。

然り、汝神のほか汝の考えを知り汝の志を知る者更になきを知らんためなるぞ。

われこの事を汝に証するため語る。すなわち汝の今まで記し来れる業わざ、すなわちその

言は真実なり。」(教義と聖約6:15—17)

このようにして救い主が直接語りかけるその言葉と、救い主の属性からもたらされる力を顕示している教義と聖約は、注意して読まなければ、十分に理解できないような無限の真理を私たちに提供している。例えば、私たちは宇宙の最も基本的な律法のひとつを教えられている。すなわち、私たちは律法に従順である度合に応じて祝福を受けるという原則である。(教義と聖約130:20—21参照)

主は謙遜な人々を求めておられるが、かと言って決断を下す時に過度に依存し過ぎることのないように望んでおられる。例えば、シオンの陣営の隊員たちが旅の方法と経路を決める時、自分で決めるように勧めている。この時、主に関する限り、「われ敢て係かかわりなし」(教義と聖約61:22)ということであったからである。

力なく、傷ついた腕で十字架にかけられ、それでもなお隣人に対する私たちの義務を忘れないようにと、「垂れたる腕かいたを挙げ、かよわきひざを強うすべし」(教義と聖約81:5)と説かれたキリストは、何と優しい心を持っておられる御方だろうか。

教義と聖約の中には、完全とはどういうものが、様々な形で描かれているが、ほとんどは完全を願うものであった。しかしある時には、「そは、われ全能者は世の人々の邪悪を懲さんとて諸々の国民の上にわが手を置きたればなり」(教義と聖約84:96)と完全を厳しく要求されることもあった。またある時には完全であることをほめられることもあった。何世紀も昔偉大な信仰を持つ百率長をほめたイエスが、今またこの末日に「主なるわれは、彼の心実直なる故に彼を愛す」(教義と聖約



124：15)と云ってハイラム・スミスをほめられたのである。

また教義と聖約には、救い主の標準が至る所で明らかにされている。十戒の中では、そのままで「あなたは姦淫してはならない」(出エジプト20：14)と記されている。ところがそれと関連して教義と聖約では、イエスが聖地で伝道している時に述べた心の中で姦淫することにまで触れて、こう述べておられる。「婦女を見て情欲の念を起す者は信仰に背くなり。『みたま』を与えらるることなし。もし悔い改めずんば、捨てらるべし。」(教義と聖約42：23)

貪欲な困窮者に対してもこう警告している。

「真にへりくだりたる心を持たず深く罪を悔いる精神なく、腹に満足を抱かず、他人の物を取ることを止めず、その眼は貪りに満ち、己れの手を以て働かんとせざる汝ら貧乏人たちは禍なるかな。

されど清き心、真にへりくだりたる心、悔いる精神を持てる貧しき者は幸福なるかな。そは彼らは、彼らを救い出さんために権能と大いなる栄光とを以て来る神の王国を見ん。地の豊なるものは皆その人のものとなればなり。」(教義と聖約56：17—18)

またエドワード・パートリッジは数多くの警告を受けたが、同時に愛にあふれる主は、彼に神からの賞賛の言葉も惜しまなかった。(41章)そして彼をいにしえのナタナエルにたとえられた。しかし、こうした高い賞賛の言葉にもかかわらず、主はパートリッジ監督に厳しい警告と指示を与えておられる。「この事に就きてわが僕エドワード・パートリッジは義しとせられず。さりながら彼よ悔い改めよ。さらば赦さることを得ん。」(教義と聖

約50：39) こうした一連の出来事は私たち弱き者に何らかの希望を与えてくれるのである。

1831年には教義と聖約に含まれている37章もの啓示を受けているが、この年ほど栄えある年はなかった。マタイ24章をさらに詳しく叙述した教義と聖約45章を読めば、主が弟子たちの前途に待ち受ける、素晴らしくもあり恐ろしくもあるできごとについて必要な限り詳しく知らせようと望んでおられることがよくわかるはずである。

1836年4月3日、ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリはカートランド神殿で直接に主の現われを受けた。

「われらの心より覆い取去られて覚りの眼開かれたり。

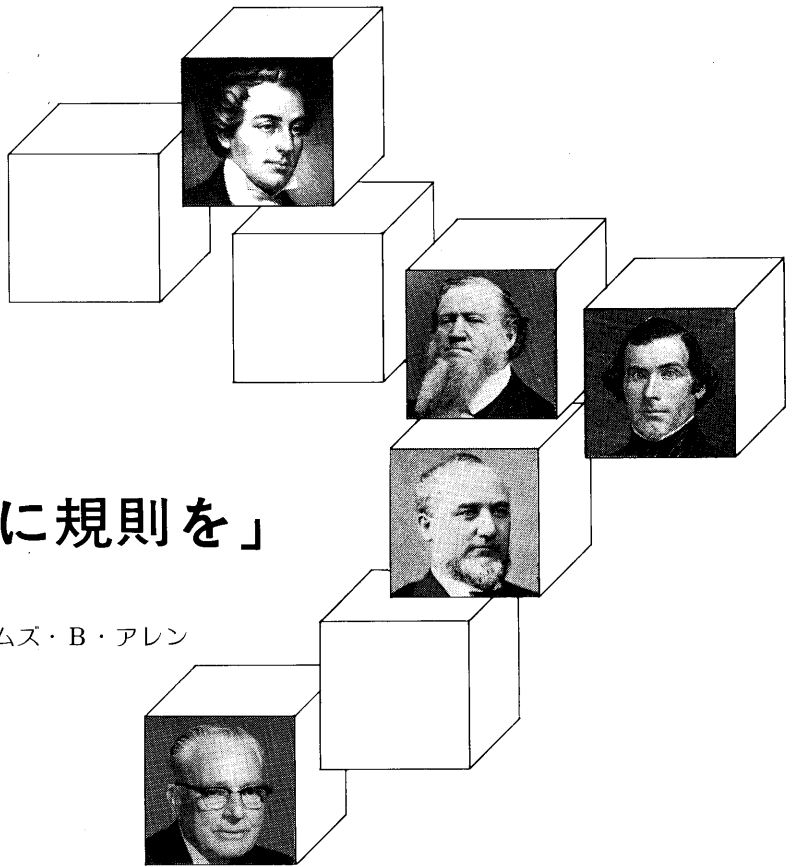
われらは、われらに面して教壇の胸欄に立ちたもう主を見たり。而して、主の脚下にはこはくの如き色したる純金の床ありき。

その眼は燃ゆる炎の如く、頭髮白きこと清き雪の如く、その顔は日の輝きにも勝りて光り輝き、その声は洪水の激する音の如し。誠にエホバの御声言いたもう。

われは始めなり終りなり。われは生ける者なり殺されたる者なり。父と汝らの間の仲保者なり。」(教義と聖約110：1—4)

事実、教義と聖約の内容について深く考えてみれば、ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンが「われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり」(教義と聖約76：22)と証したことが真実だとわかるであろう。

数々のことを明らかにしてくれるこの神の書物を、祈りを持って読むならば、私たちは必ず自分の証を強め、これまでにないほど救い主を近くに感じることができるようになるであろう。



## 「規則に規則を」

ジェームズ・B・アレン

教会歴史は、主がその民の知識と理解力をどのように増し加えられてきたかを物語っている。

**18** 36年1月21日の夜、大管長会と大祝福師のジョセフ・スミス・シニアは、カートランド神殿の一室のろうそくの灯のもとで特別な集会を開いていた。すると突然天が開かれ、一同は壮大な示現を見た。予言者ジョセフ・スミスは日の光栄の王国を見た。その中に十数年前に世を去った兄のアルヴィンの姿が見えた。そのことに驚いた予言者はこう述べている。「私は兄がなぜその王国で受け継ぎを得ているのか不思議に思った。兄がこの世を去ったとき、主はまだ、イスラエルの第二の集合に着手しておられず、また兄自身罪の赦しを受けるためのバプテスマを受けてい

なかったからである。」（「ジョセフ・スミスー日の光栄の王国に関する示現」6節）

神権によるバプテスマを受けずに世を去った人が、来たるべき世にあって、回復された教会の会員と同じ祝福にあずかることができるということは、ジョセフ・スミスにとってさえ、新しい考えであった。しかし、間もなく新しい説明が付け加えられた。予言者が、示現の内容について思いめぐらしていた時、主のみ声が聞こえた。

「この福音の知識なくして世を去り、もし世にとどまることを許されていれば福音を受け入れたであろうすべての人々は、神の日の

光栄の王国を受け継ぐ者となるであろう。

さらに、これより後も、福音の知識なくして世を去り、かつ世にとどまっておれば心から福音を受け入れたであろう人々はすべて、この王国を受け継ぐ者となるであろう。

主なる私は、すべての人々をその行ないと心の望みに応じて裁くからである。」(同上7—9節)

それからしばらく時を経たある時、ジョセフ・F・スミス大管長は贖いに関する聖典の言葉に思いをはせていた。これまで教会は死者の救いの原則についてははっきりと理解していたが、救い主が死なれた直後、霊界においてどのような使命を果たされたかについては、まだ不明な点があったのである。スミス大管長は、復活までのわずかな期間に、主がどのようにして捕われた霊たちすべてに福音を宣べ伝えられたのか不思議でたまらなかった。

「こうして不思議に思っていると、私の眼が開かれ、理解力が強められた。そして私は、主が真理を受け入れなかった邪悪な者、不従順な者たちの間へ自ら行って教えられたのではないことを知った。

見よ。主は義人の中から軍勢を組織し、使者を任命して……」(ジョセフ・F・スミス——死者の贖いに関する示現」29—30節)

これらふたつの経験から、回復された福音の極めて基本的な考え方がわかる。それは、生ける予言者を通して絶えざる啓示が与えられるということである。主はこう言われている。「神は忠信なる者たちに、規則に規則を加え、誠命にいましめを加えん。」(教義と聖約98:12)ブリガム・ヤングは聖徒たちに、知識と理解の心は除々に開かれるのであり、どのような啓示もある事柄についてすべてのことを明らかにしているわけではないと述べている。

「今のところ私は、この地上におけるいかなる政体も完全な憲法や法律を持っていないと信じている。さらに神が教会に下された数ある啓示のどれをとっていても、

完全なものはないと思っている。

もちろん、神から与えられた啓示には正しい教義や原則が記されている。しかしながら、この地上の卑しくて弱点の多い罪深い者たちが、全能者から全く完全な啓示を受けることなど不可能なのである。全能者は受け入れる者の能力に応じて語られる。」(*Journal of Discourses*「説教集」2:314)

教会歴史を読んでいくと、このことがはっきりとわかる。聖徒たちに新しい教えを受け入れる備えができた時にそれが与えられ、新しいチャレンジに対処するために教会のプログラムを変更する必要が生じた時に、予言者はそれを聖徒たちに教えるようみたまによって導かれる。教会における幾つかの重要な教義や制度の実施の歩みをたどってみると、この方法が繰り返しとられてきたことがよくわかる。

歴史をながめると、最も大きな変更は実務的な制度や手続き、管理上の責任などに見られる。こういった現象は、教会が世界的に急速な発展を遂げているここ数年特に著しい。ジョセフ・スミスは早くも1842年にこのことを予期し、次のように述べている。「ある状況の下で悪いと思われることでも、状況が変われば正しくなるということがよくある。」(*History of Church*「教会歴史」5:135)十二使徒評議員会のオルソン・プラット長老は、1877年教会が組織の一部を完全なものに改革しようとしている時に、こう述べた。「言うならば、これまで不完全で、弱点の多く見られたこの教会の歴史において、定められた時が来れば、組織は必ず完全なものとなるであろう。そして、それ以後はいかなる変更も修正も誤りだと言える時が来るであろう。それまで人が神の王国の原則や律法に関する知識を増し加えていくように、組織も除々に変化し、進展してゆくのである。」(*Journal of Discourses*「説教集」19:12)

1962年、当時十二使徒評議員会会員であったハロルド・B・リー長老がこの原則を応用し

たのは、そのよい例である。リー長老は次のように語っている。「人々の反応をつぶさに見ていると、時として実におもしろいことを知ることがある。マッケイ大管長が、七十人第一評議会を大祭司に聖任し、その責任の範囲を拡大して、他の教会幹部がいなくても王国の働きができるようその権能を与えることを発表した時のことを思い出す。私はたまたまアリゾナ州のフェニックスに行き、そこで非常に困惑しているひとりの七十人に会った。彼は私にこう言うのである。『予言者ジョセフ・スミスは、当初大祭司を七十人第一評議会会長と呼ぶのは、天の秩序に反することであると云われませんでしたか。』

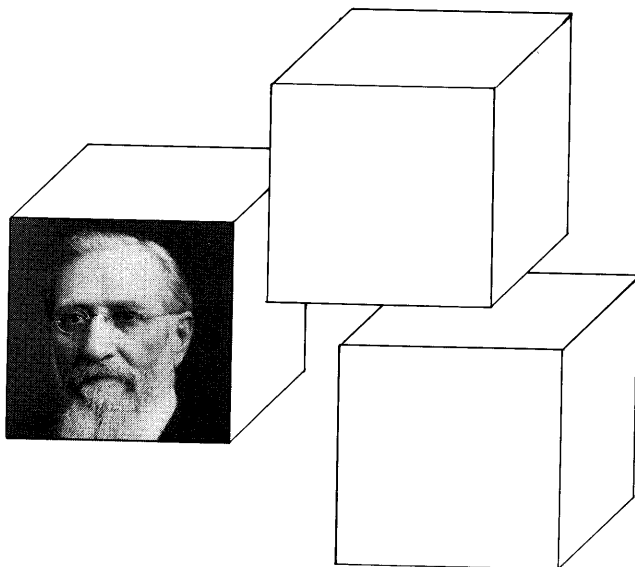
そこで私はこう答えた。『そうですね。確か私も予言者がそう言われたと記憶しています。しかし、1840年代には天の秩序に反することであっても、1960年代には反しないということがあり得るとは思いませんか。』彼はそう思わなかったのである。彼はいにしえの予言者に従っていたのであり、今日生ける予言者がいることを忘れていた。特に『生ける』という言葉の大切さを強調しておきたい。』(The

*place of the Living Prophet, Seer, and Revelation* 「生ける予言者、聖見者、啓示を受ける者の立場」1964年7月BYUセミナー、インスティテュート役員に対する説教)

聖徒たちが心しておくべき重要なことは、変更や進展があり得るはずだということだけでなく、それらは生ける予言者の指示によってあるいは指示の下になされなければならないということである。これが、今私たちが最も必要としている絶えざる啓示の原則である。

集合の教義を理解する時も、ある状況の下では正しいことでも、状況が変われば正しくないことがある、という予言者ジョセフ・スミスの言葉が生きてくる。この場合、教義上の基本的な原則は含まれていない。むしろ主は、必要と状況に応じて聖徒たちに特別な指示を与えられると理解すべきである。これが絶えざる啓示である。

ジョセフ・スミスに与えられた初期の啓示は、聖徒たちがシオンの地、特に教会の中心地に集合するよう命じたものが多かった。1840年の大管長会の記録によれば、王国建設のためには「聖徒たちの力を結集させてこの



壮大かつ深遠な業に取り組みなければならない。……真理と正義を押し進めることに熱心な人はすべて、聖徒たちの集合に関しても同じように熱心である。」(*History of the Church* 「教会歴史」4:185—86)

このことはまた、計画的な移住プログラムの組織にも導入されている。このプログラムは特に、教会の本部がユタに移動してから活発に行なわれるようになった。1847年に十二使徒評議会がヨーロッパの聖徒たちに、「できるだけすみやかに教会本部の周囲に移住するように」と呼びかけたほどである。そして聖徒たちは、西部において新しい聖徒たちの社会を確立するために、様々なものを持ち込むようにという指示を受けていた。

教会本部のある地に集合するという考えは、2世代あるいはそれ以上にわたって教えられ、その結果、特にヨーロッパの聖徒たちにとっては移住するのが当然のこのように考えられてきた。しかし、1890年代になると状況が変わった。教会は西部にしっかりと根を下ろすようになったのである。王国は新たな地で堅固なものとなり、開拓の時代は過ぎた。そして今私たちに与えられているチャレンジはシオン、すなわち「心の清き者」が住む所を世界中に建設することである。これは、明らかに教会の使命が初期の頃と比べて非常に大きくなっていることを物語っている。

このような点をよく考えてみると、教会の指導者がどれほど祈りの気持ちでもってなすべきことを決定しているかがよくわかる。1898年に大管長会の一員であるジョージ・Q・キャンロン長老は、各地の聖徒たちに次のような勧告を発した。「しばらくは、家を捨ててシオンに集合することを考えず、各地域にとどまるように。」(*Conference Report* 「大会報告」1898年10月, p.4) その翌年、たとえ自費であっても、今後シオンに集合することは望ましくないという通達が出されたのであった。

移民の方針に関する変更は迅速に行なわれた。教会は、改宗者が自国にとどまるよう、

伝道本部を常設することや、教会堂を建設することを考えた。ジョセフ・F・スミス大管長は、1910年にスウェーデンの聖徒たちにこう述べている。「我々はあなたの方にもはや移住を勧めない。自国にとどまって、福音に対する信仰を確立していただきたい。」

1958年には、ヨーロッパの3つの伝道部の部長が、「デル・ステルン」誌の中でアメリカ以外の地にシオンを築くことの必要性を力強く説いた。

「私たちはイスラエルの家の集合を説くことを中断するのではない。私たちは今でもすべての人々が霊のバビロンすなわち霊的な暗闇から抜け出ることを叫んでいる。今でも光の子らの集合に努力を結集している。また散乱したイスラエルの民を集めることに力を注いでいる。しかし、私たちは今後、彼らにアメリカへの移住を勧めることをしない。主はシオンのステーキ部を建て、主の王国の柵をさらに広げるよう求めておられることを、聖徒の皆さんにはっきりと申し上げる。……

私たちは、神が予言者の口を通して御自身の教会を導かれていることを信じている。世の状態によって大きな変化がもたらされたとすれば、私たちはその変化に適応しなければならない。」

こういった変遷は歴史と照らし合わせてみれば容易に理解できるものである。中には、特に歴史的な出来事とはっきりしたつながりのないものもあるが、そのいきさつを見ると、「規則に規則を加え、誠命にいましめを加え」ていることが少しずつわかってくる。(教義と聖約98:12)

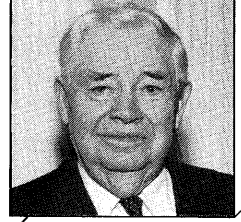
このよい例が、神会の属性に関する末日聖徒の理解の仕方である。教会が組織された1830年に比べると驚くほど深くなっている。神が感情、感覚、体をもちたもう御方であり、祈りを通して神に近づくことができることについて、聖徒たちの間には初めから疑問な点はなかった。教会が組織される以前に、ジョセフ・スミスは示現によって神と御子イエス・

キリストにまみえていたからである。

しかし、初期の頃、ジョセフ・スミスの最初の示現について深く知っている教会員はほとんどいないと言っているほどだった。と言うのも、ジョセフ・スミスはこの出来事を広く人々に語らなかったからである。1838年にジョセフ・スミスは、「悪意悪計ある人々によって流布せられた多くの風説」（ジョセフ・スミス2：1）を正すために、最初の示現を公けに表わすことにしたのである。教会が設立されて数年というもの、神会の属性についての確に説明する努力というものは支払われなかった。そのため、大勢の改宗者がそれまで信じていた教派の教えをそのまま受け入れていた。その上、モルモン経の最初の版に御父と御子をはっきりと区別していない幾つかの表現があったために、自分たちのこれまでの教えを捨てる必要もないと考えた者もいたのである。

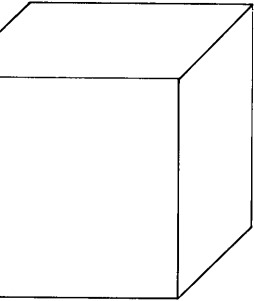
モルモン経の最初の版の多くの聖句では、救い主を神の御子だとはっきり述べている。しかし一部の聖句はなお十分に理解されず、誤解している人もいた。そこで1916年、大管長会と十二使徒評議会は、「御父と御子」と題した、教義に関する詳しい解説書を発行した。これには、聖典の中で「父」という言葉がどのような意味で使われているか、特にイエス・キリストを指して父と言っている場合について、わかりやすく説明されている。おかげで、誤って解釈していた人々の考えを正すことができた。

1835年版の「教義と聖約」には、「信仰篇」と題する教会の信条を述べたものがついていた。これは非常に重要なものであったが、公式に認められたものではなかった。この時期、ジョセフ・スミスは、御父が骨肉の体をもちたもう御方であることや聖霊の属性に関する啓示をまだ受けていないと発表していたので、必然的に講話5には、神会について、今日の教会員が理解できないような不十分な記述が見られる。それにもかかわらず、ジョセフ・



スミスはこの問題やその他数々の事柄について、ひたすら熟考し、祈った。こうして、私たちの知らないこの問題について新しい啓示を受けるべきその時、1843年4月2日に、ジョセフ・スミスはイリノイ州レーマスで「教えの重要事項」を授かったのである。この中には、神会の外形的特質、特に聖霊について、これまでになく明確に説明されている。後にこれは教義と聖約の一部に組み入れられた。「御父は、人間の有する肉体と同じく触知し得る骨肉の体を有したもう。御子もまた然り。されど、聖霊は骨肉の体を有したまわずして霊の御方なり。もし然らずとせば、聖霊われらの中に住みたもうこと能わじ。」（教義と聖約130：22）

1年後、ジョセフ・スミスは最も有名な説教のひとつとされている、神の属性に関する説教を発表した。ジョセフ・スミスはその中で、父なる神は「私たちが今ある如くかつてあり、……」と述べ、聖徒たちに新しい理解の眼を開かせた。さらに天父についてこう説明している。「今は昇栄した御方となり、……神の御性格を確かに知り、我々が人と語るように神と語り得ること、神がかつて我々のよ



うな人であられたこと、実に神御自身が我々の御父であり、この地上に住まわれたこと、そしてイエス・キリスト御自身も同じようにこの地上に住まわれたことを知ることが、福音の第一原則である。」(『キング・フォレット説教』「聖徒の道」1972年4月号、pp. 161—62)

こうして、ジョセフ・スミスは殉教するまでのわずか2カ月足らずの間に、数々の教えを明らかにし、今日あるような神会に関する広範な知識の基を敷いたのである。

これらはほんの数例にすぎない。末日聖徒の理解力が個人的にも全体的にも、永年「規則に規則を」加えられることによって強められたことを示すものは、十分すぎるほどある。大きな変更の中には、歴史的な状況と関連して起こったものもあれば、教会の指導者がある問題について深く考え、啓示を通して知識を求めた結果生じた変更もある。

教会の方針や考え方は停滞していない。主から新たな教えや指示をいただくために、いつの時代にあっても、予言者に天の扉が開かれているのである。

ジョセフ・スミスはこの約束を強調して、次のように記している。「われらは、すべて

神のこれまでに啓示したまいしこと、すべて今啓示したもうことを信じ、なお今より後、神の王国につきて多くの偉大にして重要なことを啓示したもうことを信ず。」(信仰箇条第10条)

しかし、こうした福音の知識を広めることに際して、極度の注意が払われた。というのも、教会の指導者たちは、「様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりする」(エペソ4:14) 危険があることを十分に承知していたからである。

これまで述べてきたような数々の変更があったにもかかわらず、ある基本的な真理や原則は昔も今も変わることなく残っている。イエス・キリストの神聖な使命と贖いに対する信仰、ジョセフ・スミスによって回復された神権の権威と権能、しかもその権威が救いに必要な儀式を執行するためになくしてはならないものであるという信仰、モルモン経が神聖な書物であり、予言者ジョセフ・スミスの示現と啓示を受けたことに対する信仰、また教会に絶えざる啓示があることの確信、などがそれである。

私たちは、教会の大管長、管理大祭司のみが、新たな啓示を明らかにする権能を有する予言者、聖見者、啓示を受ける者として支持されることに心を留めなければならない。J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は、1954年に教会のセミナリーおよびインスティテュート教師に対して、こう繰り返している。「教会のために啓示を受け、聖句に権威ある解釈を与えて教会員に教え、これまでの教会の教義に何らかの変更を加える権利をもつ者は大管長しかいない。」

歴史を学ぶことの価値はひとつに、教会の発展や進展、プログラム、教え、また絶えざる啓示の実体を確かめることにある。末日聖徒は、今後どのような変更があろうとも驚いてはならない。こう自分に問いかける必要がある。「これが回復された教会の本質といえるものではないだろうか」と。



## 与えられるのは石でしょうか パンでしょうか

フランシーヌ・ベニオン

イエスは、私たちが答えを求めている時、たとえ話で私たちの心を慰めて下さった。

**私**の娘が5歳の頃、不思議そうに祖母を見つめて言いました。「おばあちゃん、おばあちゃんの足ってほんとに大きいのね。」

「そうなのよ、リン。でもどうしようもないの」と祖母は答えました。

するとリンが言いました。「ううん、そんなことないわ。」

「どうするの？」

「お祈りできるじゃない。」

リンは、祖母がどうして足のことをお祈りしないのか、理解できなかったのです。私は、おばあさんが足のことは神様に祈るほど大きなことではないと思っているからよと答えました。

「じゃあ、ママは大切なことしかお祈りしないの？」

「私たちは何か助けてほしいことについてお祈りするわ。でも、自分の思っているようにして下さいって天のお父さまにお願いするよりも自分で頑張るって努力することの方がも

っと大切なときだってあるのよ。」

「どうして？」

「そうね、そうやって頑張って行って私たち大きくなっていくの。それに、もしふたりの人が同じものを別々の大きさでほしいと言ったら、どうする？」

「うーん、こまっちゃう。」

「わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。」(ヨハネ14:13) 私たち大人でさえもしばしばこの言葉の意味を捉えることができずに悩むことがあるのに、わずか5歳の幼いリンはその真意の幾分かをつかんだようでした。

もっと具体的に言えば、次の聖句はどういう意味でしょうか。「されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じせしむ。されどもし願うところ正しからずば、かかる感なくして汝の心は次第に鈍くなり、そはついに悪の悪たるを忘れしむるに至らん。」(教義と聖約9:8, 9)

また神はあらゆる所で様々な人々に、「求めよ、されば与えられん」と言っておられますが、この言葉は、神に問題を持ってゆけば、それが解決できるように助けて下さるという意味のようです。

これは、キリストが弟子たちに語った祈りについての説教にはっきりと言われています。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。」(ルカ11:9)

それから主は、天父が私たちに抱いておられる純粋な愛について話しております。

「あなたがたのうちで、父であるものは、その子が魚を求めるのに、魚の代りにへびを



与えるだろうか。

卵を求めるのに、さそりを与えるだろうか。

このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとするれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか。」(ルカ11：11—13)

この聖句は天父がまず私たちに与えたいと思っておられること、さらに祈りの時に私たちが陥りやすい問題についても示唆しているような気がします。つまり、実際にはパンをいただいているのだけれど、それには気づかずに、神は石を与えて下さっていると思って、結局答えに気づかずに過ごしてしまうことです。これまでに挙げた聖句は、天父は私たちを愛しておられ、決して石を与えたりはなさらないと教えています。

神が祈りに答えて下さった、失くした財布が見つかったとか、結婚相手を知ることができたとか、どのような正しい職業を選ぶことができたとか、また子供に部屋をきれいにさせるのにどうしたらよいか、その方法を知ることができたといったように神から助けを受けた証を持っている人を私たちは知っています。そう言った人々は、日常生活の中で問題を解決する直接の助けがあったことについて心動かす証を述べてくれます。

ところが、私たちにそういう祝福を受けたことがないために、人々の力強い証を聞いて驚いたり、がっかりしたり、時には罪悪感に悩まされたりすることがあります。私自身は「絶えず祈りなさい」という戒めは私たちの行為を描いている言葉であって、それによって必ずしも主が常に答えて下さる」とことは何ら相関関係はないと考えています。それが私の気持ちの中の大きな力となっているようです。主が、もしいつも答えを与えて下さっているとしたら、それは主がそれぞれに違っ

た対応をされているからです。

しかし、もし人が心をこめて祈ったのに、その大切な問題に対して何の導きも得られないとしたら、その人は自分の信仰のなさを感じるか、あるいは神が助けて下さらないのか、または神は助けられないのか、さらには神はいないなどを感じるかもしれません。

祈りを通じて私たち一人一人が神と結ぶ関係はそれぞれ個有のもので、ある人の経験が他の人の手本になるというわけにはいきません。私たちの必要としているものはそれぞれ違いますから一人一人の祈りに対する神の答えも違って当然なのです。

私は、結婚以前も以後も、ささいなこと、大切なこと、この世のことそして予想もしなかった事件など、祈りによって数えきれないほど助けられてきました。

それでも、生涯の重要な大問題に直面した時に、神からの助けが感じられなかったことがありました。答えも援助も、みたますら感じられませんでした。

私はブリガム・ヤング大学の2年生の時にボブと会いました。彼がいないと、たとえ沢山の良い友人に囲まれていても、私は何となく孤独でした。しかし彼を知ってから、私たちは個々の生活様式に、大きな相違があることを知りました。しかも、それは間違いなく結婚生活にも影響を与えかねないものでした。

ボブから結婚を申し込まれた時、私は自分の判断を信頼せずに、神にその確信を求めました。私は、もしボブとの結婚が正しいなら「心が燃えるように」、もし正しくないなら「心が鈍くなるように」感じさせて下さいと心を尽くして神に祈りました。ところが、燃える気持ちも鈍い気持ちも全く感じないのです。私は自分の信仰が足りなかったのではないだろうかと考え、聞き方を変え、婚約破棄をした方がよいでしょうかと尋ねてみました。

それでも燃える気持ちも鈍い気持ちも感じられませんでした。

私たちは出会ってから1年と9カ月目に、この結婚が正しいかどうかのはっきりした確信を得ることもなく、アルバート神殿で結婚しました。私は自分で決定を下したのです。かけがえのない証人たちの前で互いに交わした誓約以外は何の保証もない危険をはらんだ人間関係の中にあえて飛び込んだのでした。それを選んだのも約束をしたのも私です。私はあの時、戒めだからというのではなく自分からそう決断する必要があったから結婚したのだと、今そう感じます。

私は神に自分の結婚の危険なところをすべて取り払ってもらい、夫との結婚生活がうまくゆくように請け負ってほしいと思っていました。しかし、神は、私が自分で問題を解決し、自分で決心をするように要求してきたのでした。ボブと私は、夫婦の絆を強くしてゆく過程で、冒険や悲しみ、成長や自己の認識そして喜びなど、まさに山あり谷ありの人生を経験しました。大抵の人には、伴侶はこの人ですというはっきりとした答えが必要でしょうが、私にはこれまで話してきたような形で成長するためにも、沈黙という答えで十分でした。恐らく、私のような例は珍しいのではないのでしょうか。ほとんどの場合、聖きみたまの証がないまま永遠の結婚誓約に入るのは賢いことではないと思います。

私は自分と同じように、人生の危急の時に際して祈りの答えを得ることができなかったという人たちを大勢知っています。みんな良い人間になることを願い、努力し、その上自分や自分を頼りとしている人たちにとって一番良い方法を選ぶことができずに、信仰をもって主の導きと助けを求めた人たちにほかならないのです。神を信じ、神の慈悲を信じている人々です。そういった人たちの大半が、

努力の末に知恵と力、信仰と愛を増し加えたことを証しています。

私たちが真心からそうありたいと望んでいないために、祈りの答えが得られないこともときにはあるかもしれません。夫は十代の後半になって、モルモン経を読み、その時主と心を交わすことも可能なことを確信したのでした。自分はそのように考えることはできないというのではなく、ただそうした飛躍的なステップを取る準備ができていないために畏れ多い行動を取るのを引き延ばしてきたと彼は言っています。そんなある日、夫は馬に乗って山に出かけ、ひざまづいて祈りました。そして自分自身が変わり得ることや主と交わったあとに自分に託される責任などについて思い巡らしているうちに、主に認めてもらいたいという望みを抱いている割には、今の平安な生活を捨てる覚悟ができていないことがわかってきたのです。彼は、自分が主と交わることによってもたらされる大きな変化を内心望んでいなかったことを自覚できるようになった時に、祈るならば、主はきっと答えて下さるに違いないと感じたのでした。そこで、彼は立ち上がって馬に乗って帰りました。

その彼が再び主に求めたのはそれから数カ月後のことでした。この時彼は、主と交わり、その責任を受け入れる用意もできていました。そして主は彼の祈りに答えて下さいました。

初めにその気持ちがなかったのは主ではなく、むしろボブの方でした。ボブは主を喜ばせたい、主に自分を良く思っていたが、安易なこの世の生活を断ち切ろうと心底から考えていなかったのです。つまり福音が真実であることを本当に確信しておらず、まだ自分が進歩することも心から望んでいなかったのです。主はボブ自身よりもボブのことをよくご存知で、このふたつの出来事を通して彼の本心を知らせて下さ

ったのでした。

私たちは自分で祈る時に、何のために祈っているかわかっていると思っていても、同時に心の中に「無意識の意図」といったものがあり、神はそれを十分承知し、理解しているはずです。このような「無意識の欲求」は自覚している他の欲求の邪魔になるので、救い主は祈る時には「真心を以て」自分自身を備えるようにとたびたび忠告しておられます。

自分の祈りにはっきりした答えが得られなくてもその経験に感謝している人が大勢います。でも祈りの種類は様々です。何の助けも得られないと思って悩んでいる人たちも、だれかの信仰を高める経験を聞けばいくらかでも励まされることがあります。祈ってみても、それとわかる答えが得られない時は比較とか理由をいくら捜しても並の方法で容易に解決できるものではありません。

私たちが、神は親切で万能で、私たちを愛しておられることを知っていれば、天候に左右されることも、健康や苦痛や死に関係なく、結局主は子たちに一番良いものを与えて下さると考えることができます。たとえそのときに「最高に良いもの」だと気づかなくても、あるいは苦しみや悲しみに甘んじることがあろうとも、そしてその確証が得られなくても主が必ず祈りに答えて下さると信じられるはずです。

しかし、もし私たちが神の存在や慈悲、権能そして特に私たちに対する愛を疑うならば「答えのない」、いや「答えに気づかない」祈りをして虚しさだけが残るだけかもしれない。答えを受けない祈りについてどう思うかは、結局はその人の神に対する信仰の強さやその目的をどの程度理解しているかにかかってくるのです。

聖典には、主を信頼し、主をほめ、讃え、主を崇め、主の力と威勢を告げよと繰り返し

言われています。でも私は、神が神としての御自分の立場を確立するために私たちの信頼や賛美や崇敬を要求しておられるとは思いません。神はご自分のことをよくご存知です。むしろ、神を理解することからくる確信が必要なのは私たちです。この世界や世の苦しみ、痛みをとうてい理解し得ない私たちの方なのです。

昔のイスラエル人は、神への信頼を持ち続けるように神が与えて下さった指示に従わなかったことが原因で、神に対する信頼が持続することができませんでした。多くのユダヤ人やニーファイ人やキリスト教徒が、主に對する信頼を保ち続けるには通常よりさらに多くの勉強や意志力、希望や祈りが要求されます。神を知り、神を信頼することが容易にできる人は、聖典を学び、それについて考え、教えるところから従った生活をし、感謝や願いを述べるだけに終らない神とのつながりを深める祈りをしている人でしょう。

パンを口にしている、それを石だと勘違いする人がいるでしょうか。魚を見て、蛇だと言う人がいるでしょうか。卵を手にしなごらさそりの針だと考える人がいるでしょうか。たとえそういう幻覚を覚えることがあったとしても、間違いが生じたのはその事物とは関係なく、私たちの知覚の問題なのです。

神は人間が考え出したものではありませんし、人間の理解の粹に限定されることはないのです。主の道は人間の理解に左右されないのです。私たちが求めさえすれば、神と神の道を知ることのできる方法を教えて下さっているこの時代に、私たちは祝福されて生活しています。答えのない祈りから冷たい石やさそりの針を感じることはあったとしても、主の愛を信じ、主の祝福を知るならば、私たちはパンや魚や卵を食べて大きく成長することができますはずです。

**私** は開拓者たちといっしょになって、アイオワ州を通る聖徒たちのために道を作りました。そのあと、ノーヴーに残してきた妻と3人の子供を連れに帰りました。それから家族を連れて320キロもの距離をアイオワに渡り、ひとたびそこに家族を残して、再び160キロも離れた部落へ食べ物や日用品を買に行きました。

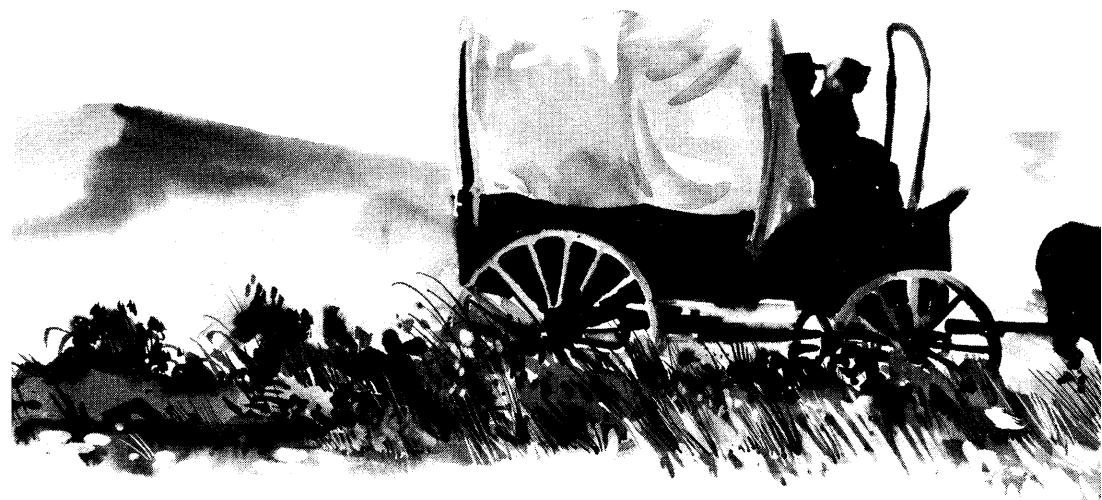
ところが私はそこで病気にかかって

しまい、どうしようもなく家族に迎えにきてもらいました。しかしその妻と子供たちも到着した翌日に病気にかかってしまったのです。私たちはみすばらしいあばら屋を見つけ、そこに身を寄せたのですが、近くに水がありません。

ある日、私は病気の家族のために水をくんでしようとしました。しかし体が弱っていてそれもできませんでした。夜になると、家族は熱を出し、しきり

# 主はそな

お話：ジェーコブ・ハン布林



に水を欲しがりました。

このような試練の時にあって、私の心に良くない感情が起ってきました。こうした私の心の状態を見て、主が悪魔に私を試みさせたのでしょうか。ちょうどそこにメソジスト教会の牧師が通りかかり、私たちの悲惨な状態を見て驚きの声を発しました。彼は、みんなが住める家もあるし、なんでも整っているから、もしモルモン教会をやめる

なら、どうぞ私たちの所に来て下さい、と言いました。しかし私はそれを断わりました。彼はそのままそこを去っていきました。

その後、私はひざまずき、どうかこの悲惨な状態にある私たちに憐れみをたれたまい、だれかの心を和げて私たちを苦しみから救って下さいと主に願いました。

1時間ほどして、ウィリアム・ジョ

# えたもう



ンソンという人が12リットルほどの水が入ったかめを持ってきて、こう言いました。「夕方、1日中脱こく機をまわして、疲れて帰ってきて、横になったのですが、全然眠れないんです。あなたがたが水に不自由しているって、何かがそう教えてくれたのです。それでかめを持ってカスターの井戸に行って、水を汲んで来たというわけです。これでやっと家に帰って眠れますよ。家にはとり肉やほかにもいろいろと病人に

いいものもありますから、何か必要なものがある時は、遠慮なく言って下さい。」私は、これこそ私の祈りに対する主からの答えだと思いました。

翌日になると、やぶからたくさんのおずらが飛び出してきて、私たちは何の苦もなく必要なだけつかまえることができました。あとでわかったことですが、野営をしていた聖徒たちも同じようにして食物を与えられたということです。



女性は、自分には一度もチャンスがなかったと言いつけていました。この女性、著名な植物学者のルイ・アガシ博士のロンドンでの講演を聞いた後、博士に不平をこぼしてきたのです。彼女の不平に対して、アガシ博士は答えました。『マダム、あなたは一度もチャンスがなかったとおっしゃるのですね。

ところで、あなたの今のお仕事は何ですか。』

『私は今だに独身で、妹の下宿屋を手伝っています。』

『どのようなことをなさるのですか。』

『ジャガイモの皮を向いたり、タマネギを刻んだりしています。』

博士は尋ねた。『マダム、そのような家庭的

## 学ぶことをやめてはなりません

七十人第一定員会会長  
マリオン・D・ハンクス

これは、ある時著名な植物学者ルイ・アガシ博士に話しかけてきたひとりの女性の話です。



な仕事はどこですのですか。』

『台所の階段の一番下の段です。』

『足をどこに置きますか。』

『化粧れんがの上です。』

『化粧れんがってどんなものですか。』

『さあ、わかりません。』

『ところで、そこに座って仕事をするようになってどの位経ちますか。』

『15年になります。』

『マダム』アガシ博士は言った。『私の名刺を差し上げますから、化粧れんがの特質について私に手紙を書いて下さいませんか。』

彼女は博士の言葉を真面目に受け取った。家に帰ると、辞書を調べ、れんがは粘土を焼いて作ることを知った。しかし、それだけではアガシ博士に送る答えとして簡単すぎるように思えた。そこで、食器を片づけた後、彼女は図書館に足を運び、百科事典を調べた。百科事典には、化粧れんがは白陶土と含水珪酸アルミニウムを陶化したものであると説明されていた。しかし彼女には何のことやら全くわからなかった。そこで好奇心の強い彼女はどこまでも追求し、自分が納得いくまで調べ上げたのである。まず「陶化」という言葉を取り上げ、それに関する資料にはすべて目を通した。それから博物館を訪ねた。彼女は人生の地下室から「陶化」という翼をもった新しい世界に抜け出したのである。新しい旅立ちをした彼女は、それから「含水」という言葉に着目し、地質学の勉強からさらには神がこの世界を創造し、粘土層を置かれた時代にまでさかのぼって研究した。ある午後、彼女はれんが工場に出かけて行った。そして、120種類以上のれんがやタイルの歴史を知った彼女は、なぜそんなに多くのれんがやタイルが必要なのかその理由を知ることができたのであった。彼女は、化粧れんがとタイルを主題に36ページにのぼるレポートを書いた。

やがてアガシ博士からはこのような手紙が届いた。『マダム、あの記事は例の問題に関してはこれまでの最高のもです。もしよろし

ければ星印のついた3つの言葉を変えさせていただきますませんか。そうすれば私の方で出版して、その代金をあなたにお送りします。』

少し経ってから、1通の手紙と共に250ドルが届けられた。手紙の下の方にこのような質問が鉛筆で書いてあった。『このれんがの下には何があるでしょう?』つい先頃時間を有効に使うことを学んだ彼女はただの一語『アリ』とだけ書いて返事した。すると博士は、アリについて教えて下さいと書いてよこした。

彼女はアリの研究を始めた。アリの種類は1,800から2,500種類もあった。中には、1本の虫ピンの上に3匹のアリを連ねて並べても、まだゆりのある程小さいアリもあった。体長25ミリのアリでも幅800メートルの大軍ともなれば、その行く手にあるものは何もかも追い払ってしまう。アリは目が見えない。また、アリは死ぬ日の午後になると飛び立つ。アリの作るアリ塚は、指ぬきの中にスッポリ入ってしまうほど非常に小さい。働きアリは油虫の尾端を突ついてそこから出る甘露をなめ、それを女王アリや雄アリのいる所まで運ぶ習性があることもわかった。

多読と骨身を惜しまない緻密な研究の後、この女性は360ページにも及ぶアリについての研究をアガシ博士に書き送った。博士はそれを本にして出版し、販売した代金を彼女のもとに送ってきた。その結果、彼女は研究を進めながら夢見ていたすべての土地を訪ねることができたのであった。

さて、この話をお聞きになって、私たちは皆、陶化された白陶土と含水珪酸アルミニウムの上に(そして下にはアリがいる)自分の足で座しているのだということを感じて痛むのだろうか。チェスタートン卿はこのように答えている。『つまらないものはひとつもない。あるのは無関心な人々だけである。』

学ぶことをやめてはならないのです。



# ホームティーチャーの力

H・ブルース・ボーマン



19 70年5月のある晴れた日曜日の午後のことである。私は同僚と一緒にアパートに帰ってきた。しばらく休息し、それから聖典の勉強をして、アンデス伝道部ペルー・トルヒヨ第一支部で開かれる聖餐会に出席するつもりでいた。上段のベッドに寝て聖典を読ん

でいると、突然ベッドが激しく揺れた。机は倒れ、箱が床の上を走り回っていた。地震だ！私は一生懸命スペイン語で何と言えよか考えた。しかしどうしても出てこなかった。それもそのはずである。耳にしたことはあっても、これまでその言葉を使う必要もなかつ

たのである。

幸いにも、トルビヨの被害はたいしたことなかった。しかし南へ150キロほど下った港町チンボテの住民は皆避難させられた。このチンボテの町には最近、宣教師が転任になって、ここ2週間ばかり宣教師はいなかった。教会員もどういう人がいるかわからず、宣教師たちは散り散りになった聖徒たちの安否が気懸りであった。宣教師のひとりが支部長に召されたといっても、彼はその地震のあった日曜日がこの町に来て最初の安息日だったのである。

私は、以前6カ月間このチンボテの町で伝道し、支部長をしたことがあった。そこで私ならば会員たちもよく知っているということで、チンボテへ行き教会員を捜し出し、何が必要か調べてくるように命じられた。

チンボテに着いてみて、私はがくぜんとなった。町は8割以上が見る影もなく破壊されていた。大半の小屋やれんが家は地震で崩れ落ち、何とか持ちこたえている家も近寄れないほど壊れていた。私はこんな状態で175名にもよる会員たちを見つけ出すことは並大抵のことではないと思った。ましてや町の目印になりそうなものはすべて破壊されていたからである。

私は宣教師の支部長と一緒にまず扶助協会の会長ヘルマナ・シカロ姉妹の家を捜して行った。そして、そこにひとまず荷物を置き、それから数時間歩いては尋ね、尋ねては歩き回りながら、教会員を捜して回った。彼らは皆、家を破壊されたので、一カ所に固まってキャンプを張っていた。多くの人々はできるだけ教会員の近くにしようとして、近所の人々に何も告げずに集まってきたのである。

5時間も歩いたのだろうか。偶然、私たちはある姉妹の壊れた家の跡でキャンプを張っている会員たちを見つけた。彼らは私たち以上にたいへん喜んでくれた。しかし、私はまだどこにいるかわからない残された人々のことを思うと気が重かった。

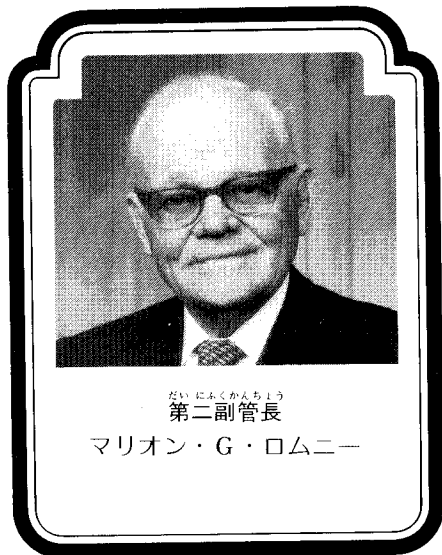
私は、みんなに第一副支部長のヘルマノ・カルデナスの居所を知っている人がいないか尋ねてみた。キャンプの後方近くにいるということで、そこに行ってみると、ちょうどカルデナス兄弟が子供たちを寝かしつけているところだった。私たちは再会を喜び、あいさつを交わしてから支部のほかの会員たちの見つける良い方法がないか話し合った。

私はあの時のあの兄弟の驚きとも落胆とも思われる何ともいえない顔を今でも忘れることができない。彼はズボンの後のポケットからしわくちゃになった一枚の紙を取り出し、私に手渡しして静かに言った。「長老。私たちはあなたが長老定員会で教えて下さった通りにしました。ホームティーチャーを送ったのです。」その汚れた紙には、2家族を除く支部全員の居場所、状態、健康などが一つ一つ記入されていた。これらの情報はすべてホームティーチャーが集めたのである。

その時私たちは初めて自分たちが主の方法である神権の系統ではなく、自分の方法で会員たちを見つけようとして何時間も無駄な時間を費やしていたことを知ったのである。チンボテの経験を通して、その日私たちはよく組織されたホームティーチャーならばこれだけ素晴らしいことができるという証を持った。こうして私は主が私たちにホームティーチングを定められた、少なくともひとつの理由を知ったのである。



# 小さいとも 小さなお友だちへ



の大会で話す話のことでいっぱいでした。「何と言って、子供たちに愛を伝えたらよいのだろうか。」

この人は、マリオン・G・ロムニー長老でした。ロムニー長老は、聖書のマルコ伝10章をひらきました。そこには、イエスさまがどのように子供を愛されたかが書かれています。ロムニー長老は、汽車のまどにもたれて何度も何度も読みかえました。子供をだいたイエス様のすがたが見えるようでした。ロムニー長老は、聖書をとじてうしろによりかかり、目をつむりました。

その時です。大きな石が山のしゃめんからころがり落ちてきて、ロムニー長老がすわっているところのまどをつきやぶったのです。運よく、石はロムニー長老のほおをかすめただけでした。

一週間後、ロムニー長老はソルトレークのタバナクルに立ってこのように話しました。「あの時、もしわたしがまどにもたれていたなら、わたしは、きょうこうしていることはできなかったでしょう。」

少年のころから、ロムニー長老は教

た くさんの乗客をのせた汽車が、サンフランシスコから東へと向かっていました。汽車は、フェザーリバーの山あいをぬって走っています。山には、まだところどころ雪が残っていますが、3月の光の中を雪どけの水がいきおいよく流れ、木々や草花もようやく小さな芽をふくらませていました。

乗客の中には、まどに顔をおしあてて外の景色をながめている人もいれば、ねむっている人もいます。その中に、じっと何かを考えているひとりの人がいました。かれの頭の中は、初等協会

会が大すきでした。ロムニー長老は、  
小さい時の思い出をこのように話して  
います。

「わたしは、メキシコではじめて初  
等協会を知りました。まだうつってき  
たばかりでしたので、わたしたちは自  
分たちの手で家をつくり、畑をたがや  
して生活しました。

こういうたいへんなときでも、両親  
は、わたしを初等協会へ行かせてくれ  
ました。あの時のたてもの、しんせつ  
な先生、歌、レッスンなど、いまでも  
よくおぼえています。川のそばをさん  
ぼしたり、丘にハイキングに行ったこ  
ともあります。はだして歩いた地面、

夏の夕立ち、今思い出しても楽しい気  
持ちになります。

そうした小さいころに学び、けいけ  
んしたことが、いままでのわたしをみ  
ちびいてくれたのです。

初等協会の先生は、『うるわしき朝  
よ』『長き沈黙破りて出づ』『主は生け  
りと知る』『高きに榮えて』などの讚美  
歌を教えてくださいました。

わたしは、小さい時から讚美歌を歌  
うことができ、心から感謝しています。  
先生にも感謝しています。讚美歌は、  
今まで、ずっと、わたしをはげまし、  
みちびき、助け、そして、天国にいる  
ような気持ちにさせてくれました。」





# ☆な☆が☆ 流れ星

はなし  
お話：アイリス・シンダガード

ジェイソン・C・ジョーンズは、上着のえりを立ててしげみの中を走ろうとしました。けれど、冷たい雨はジェイソンの体をたたきつけます。

「いつになったら、また、もとのようにあたたかい所へもどれるんだろう。」

1833年、11月の寒い夜のことです。

思えば、7月のあの暑い日からすべてのかなしみが始まったような気がしません。

その朝、お父さんは言いました。「ジェイソン、お父さんは必要なものを買いにインデペンデンスへ行ってくる。その間にこわれたへいをなおしておいておくれ。いいかい、おまえはもう11だ、お母さんとジェーンのめんどろをよく見てあげるんだよ。」

昼すぎ、ジェイソンがへいをしゅうりしていると、馬のかけてくる音がし

ました。

道路に目をやると、大勢の男が馬にのってこちらに向かってやってきました。よく見ると、みな手にライフルやむちなどを持っているではありませんか。

ジェイソンは、みぶるいしました。

彼らもぼう徒だろうか、ジェイソンは、神の聖徒をおびやかす人々について聞いていました。夜中に、お父さんやお母さんが、ころされた人たちのことを話しているのを聞いたことがあります。

男のひとりがジェイソンのそばに来て言いました、「おまえもモルモンだろう」。

ジェイソンはうなずきました。

「帰ってみんなに伝えろ。早くここから出て行くようにな。」

ジェイソンはだまっていました。



お父さんが家に帰ってくると、ジェイソンはそのことを話しました。「ぼくたち何も悪いことしていないのに、どうしてここにいちゃいけないの。」

お父さんはかなしそうな顔をして言いました。「この町がモルモンにとられるとおもってるんだよ。」

それからしばらく平和な日が続きました。ある夜、お父さんはまたインデペンデンスへ出かけることになりました。モルモンの指導者が集まって話

し合うのです。

でかける前に、お父さんはほほえみながら言いました、「お母さんとジェーンをたのむよ。すぐ帰って来るからね。」

2週間がすぎましたが、お父さんは帰ってきません。夕方、外に出てお父さんの帰ってくる方をながめました。その時です。ジェイソンの体は急にかたくなりました。急いで家に入るとドアをしめました。

深く息をすって、ジェイソンは言い

ました。「お母さん、男の人たちが来るよ。」

お母さんの手からつくろっていたシャツが落ちました。「うら口からにげましょう。ジェイソン。さあ早く……」

言いおわらないうちに、大きな男がドアをあけて入ってきました。「モルモンめ、出て行け」「火をつけるぞ」

外で大きな音がします。へいやなやをこわしているのです。ジェイソンにはすべてがしんじられませんでした。

お母さんとジェーンのかたかけをさがして、ジェイソンはかごの中に食べ物を入れ始めました。すると、大きな男がかごを取りあげて、「ここがもえてしまわないうちにさっさと出ていけ」とさげびました。

ジェイソンとお母さんとジェーンは、やけ落ちる家をふり返りながら走って行きました。

その夜、3人は、家をやかれたモルモンの人たちといっしょに、みぞれでぬかっている草原を歩かされました。つかれて休もうとすると、馬にのった男たちにせき立てられます。

人々は北へと歩き続け、あるばんおそく、ミズーリ川に着きました。

川岸は、道具やはこ、食料や動物でいっぱいになりました。一せきの小さ

なボートでこれを向こう岸に運ぶのです。

あたりが暗くなったかと思うと、ジェイソンはお母さんやジェーンとはぐれてしまいました。雨がはげしくふり始めました。ジェイソンは、しげみの中にちこちこまて、今までのことを考えていました。かなしくて、さびしくてどうすることもできませんでした。

ふと、ジェイソンは、こんな時どうすればよいのか思い出しました。どろの中にひぎまずいで、ジェイソンは助けを求めて祈りました。

ジェイソンは、とうとうねむってしまいました。とつぜん、人々のさげび声が出て、ジェイソンはしげみの中からはい出しました。

雨はすっかり止み、人々はみな空をあおいでいます。ジェイソンも顔を上げました。なんと美しい光景でしょう。

まっさおにすみわたった空の上に、まっかにもえる星が尾を引いて落ちてくるではありませんか。まるで、たくさんの星が天のどこかでぶつかって、地球にとびちってくるようです。

ジェイソンには、空の星ぜんぶが川岸に落ちるみんなのところへ落ちてくるように思われました。



星が消えて、空がもとのようになると、ジェイソンはまたかなしくなりました。その時です。だれかの手がかたにふれました。見ると、お父さんが立っていました。

「お父さん、……会いたかったよ」  
なみだがこぼれてきました。

お父さんは、ジェイソンを強くだきしめて言いました。「おいで、お母さんとジェーンもいるよ。」

ふたりは川岸にそって歩いて行きました。テントの前に火があたたかくもえ、中にはお母さんとジェーンがいました。

「またみんないっしょにそろった。」  
お父さんは、こう言ってジェイソンを中へ入れたのです。



# わたしの友だちレナ

ジェニファー・R・グラント

レナ・バードに会って、私の人生は大きく変わりました。レナは、小学校一年生の女の子です。

21さいの時、私の家族はこの町に引っこしてきました。レナにはじめて会ったのはその時です。10月のある日、バード家の子供たちとフット・ボールをしていると、子供たちは教会へ行く用意をするようにと呼ばれました。「教会？」ふしぎに思ってたずねると、レナは末日聖徒イエス・キリスト教会について話してくれました。そして、私を初等協会へさそってくれたのです。

レナのお母さんも、私が初等協会へ行くことをよろこんでくれました。レナは私に、「バプテスマ受けてい」と聞きました。びっくりしている私を見てレナのお母さんはわらっていました。レナにつれられて、私は、はじめて初

等協会へ行きました。大学生が初等協会へ行くというのはおかしいでしょう。

子供たちが歌った「わたしは神の子」はとてもきれいでした。その週から私は宣教師のレッスンを受けることになりました。私は、ジョセフ・スミスが予言者であることをすぐに受け入れることができました。そして、3週間後、バプテスマを受けました。

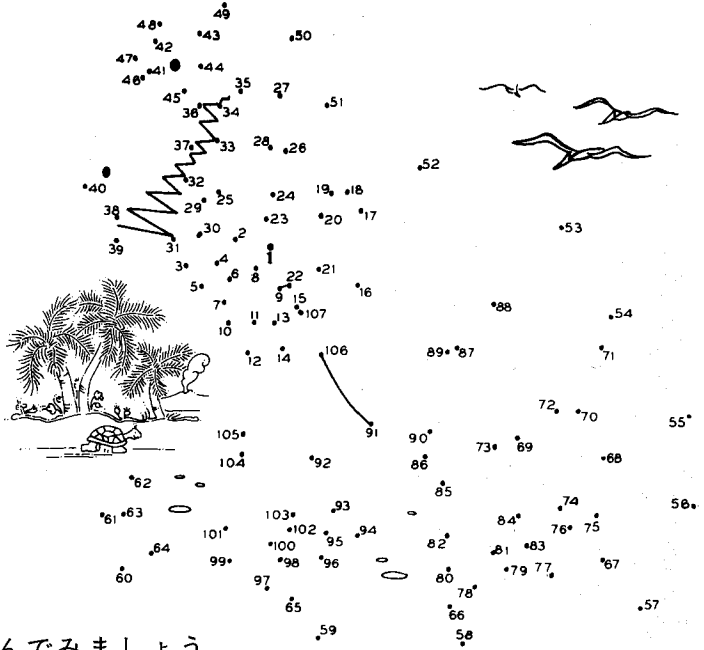
バプテスマを受けてからすぐに、私は、初等協会の第二副会長にめされました。なんとうれしかったことでしょう。教会は、私にとって一番大切なのです。私は、この教会が正しいこと、そして今も予言者がいることを知っています。私の証は日々強くなっています。

さいごに、私は、幸せを分け与えてくれた、小さなそしてすばらしいお友達レナに心から感謝しています。



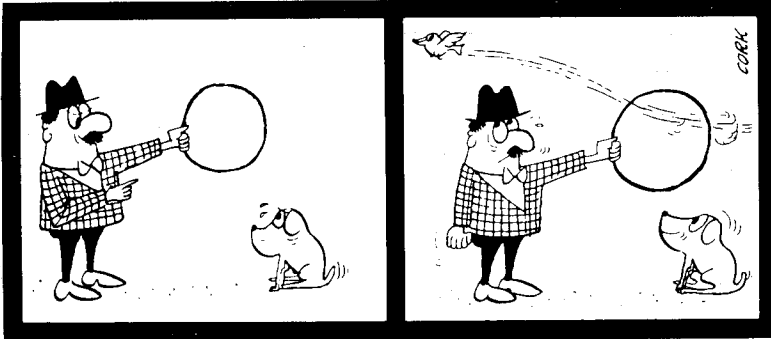


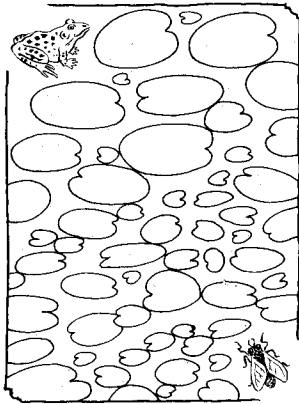
# おもちゃばこ



てんをむすんでみましょう。

じゅんばんにてんをむすびましょう。これは、ティラノソーラスというきょうりゅうです。





### カエルのしょくじ

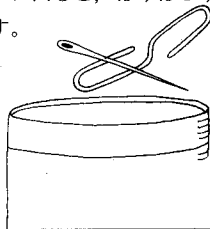
カエルが、はずのはをふまないでハエをつかまえるには、どうすればよいでしょう。

### みず 水にうかぶはり

はりが水にうかぶのを知っていますか。はり、クリップ、水の入ったコップをよういしてください。

はじめに、図のようにクリップを直角にまげ、おちないようにはりをクリップの下の方にのせます。それからしずかにはりを水の上にのせます。はりがういたら、クリップをそと取りのぞきます。

注意：水の上にのせるとき、はりはかならずすいへいにしておきます。どちらか一方が早く水の中に入ると、はりはずんでしまいます。



### きょうかい 教会のれきしを おぼえよう

早いじゆんに、ばんごうをつけましょう。

- A. ニューヨーク州、フェイヤットで教会がそしきされた。
- B. プリガム・ヤングが開拓者をつれて西部へしゅつばつした。
- C. 天使モロナイが、ジョセフ・スミスにあらわれた。
- D. ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリは、ペテロ、ヤコブ、ヨハネからメルケゼデク神権をうけた。
- E. ノーブー神殿がほうけんされた。
- F. 1805年、12月23日、ヴァーモント州、ウィンソル郡、シャロンでジョセフ・スミスが生まれた。
- G. 教会がオハイオ州カートランドにうつった。
- H. バプテスマのヨハネが、ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリにアロン神権をさずけた。
- I. 聖徒が、ノーヴーからおい出された。
- J. ジョセフ・スミスが、森の中で示現を受けた。
- K. ジョセフ・スミスと兄ハイラム・スミスが、カーセージでころされた。
- L. ジョセフ・スミスは、金版、ウリムとトミム、そして胸当てを見た。
- M. ノーヴーがうつくしい市になった。

- こたえ
- |       |       |       |
|-------|-------|-------|
| A. 7  | F. 1  | J. 2  |
| B. 13 | G. 8  | K. 11 |
| C. 3  | H. 5  | L. 4  |
| D. 6  | I. 12 | M. 9  |
| E. 10 |       |       |



## ほけつの ピッチャー

デビッドは、小さい時から野球がだいすきでした。いつもチームのピッチャーになることをゆめみていたので、れんしゅうやしあいを休んだことは一度もありませんでした。お父さんやお兄さんがひまな時はいつでも、キャッチボールのあいてになってもらいました。テレビを見ている時もグローブとボールを手からはなしません。グローブをはめたままでテーブルについて、みんなをいらいらさせたこともあります。

野球シーズンがおわりに近づいたある日、コーチが、日曜日に集まるとくべつなれんしゅうをしてそれからしゃしんをとると言いました。「ぼく、日曜日には来られません。」デビッドは言いました。

「来た方がいいよ。来年のことについて話し合うんだ。」

いつもなら走って家に帰って、野球のことを家族に話すのですが、きょうは、とても話すきになりません。とうとう、日曜日にはれんしゅうには行きませんでした。でも、毎週月曜日のれんしゅうにはすべてさんかしました。ついに、来年のチームのせん手を決める日がきました。

「君をレギュラーのピッチャーにしようと思うんだが、日曜日のしあいにも出られるかい」とコーチが言いました。

「いいえ、日曜日にはできません。」

「ざんねんだなあ。じゃ、ほけつのピッチャーになってもらうよ。」その年、デビッドはずっとほけつのピッチャーでした。ほかの子供たちは日曜日でもしあいをしましたが、デビッドは、家族といっしょに日曜学校と聖餐会にしゅっせきしました。

デビッドが10才になった春、コーチはチームのみんなに、来シーズンのために新しいせん手を選ぶことを知らせました。「デビッド、今年こそは、君にレギュラーのピッチャーになってもらうよ。もちろん日曜日にもしあいはあるが。」コーチが言いました。

「考えさせてください。」その夜、デビッドはお父さんと話した後で、正しいことを行なう勇気が持てるようにとくべつに天父に祈りました。次の日、デビッドはコーチに、ほけつのピッチャーでいることを話しました。

それから、デビッドは毎日れんしゅうに行きました。しばらくしたある日、コーチは、チームのみんなに、デ

ビッドが日曜日のしあいに出られないことを話しました。そして、「だが、デビッドをレギュラーのピッチャーにしようと思う。そして、日曜日にはほけつにかわってもらうことにする」と言いました。

しばらくのあいだだれも何も言いませんでした。デビッドの心ぞうは止まりそうでした。チームのみんなは少しまよいました。でも、さいごにはコーチの考えに心からさんせいしました。



# せいしよ よ 聖書を読みましょう

だいかんちやう  
大管長

スパンサー・W・キンボール

ちい  
小 さいころ、わたしは動物の物語を  
読んで動物になりたいと思った  
ものです。また、ぼうけんの物語など  
おもしろい本をたくさん読みました。  
「ポンペイ最後の日」という本を読ん  
だ時は、どうしてもそこへ行ってみた  
くてたまらなくなりました。

なが あいだ にちやうがっこう かい  
長い間デゼレト日曜学校のかんり会  
で働いていた父は、ジュビニール・イ  
ンストラクターの本を持っていました  
が、その中にある昔のできごとや記事  
を読むのも楽しみのひとつでした。

けれども、一番熱心に読んだのは聖  
書でした。小さい時から絵入りの聖書  
の物語を読むのは大好きでしたが、原  
文の聖書はとでも長くてむずかしいよ  
うに思えました。ある時、スーザン・  
ヤング・ゲイツという姉妹が、ステ  
キ部大会のMIAの集会で聖書を読むこ  
との大切さについて話をしました。最  
後にゲイツ姉妹は、聖書を読み通した  
ことのある人に手をあげさせました。  
ほんの少しの人が、おそろおそろ手を  
あげました。「全部ではないけれど、ほ  
とんど読みました」と言いわけしてい

ひともいました。

この時です、わたしが聖書を読む  
と決心したのは。家に帰るやいなや、  
わたしは創世記の第1ページを開いて  
読み始めました。それから毎日、わた  
しは自分の屋根うら部屋で、夜おそく  
まで読み続けました。

いちねん ちか  
一年ほどして、わたしはやっと黙示  
録の最後の言葉にたどり着きました。

「これらのことをあかしするかが  
仰せになる、『しかり、わたしはすぐに  
来る』。アーメン、主イエスよきたりませ。  
主イエスの恵みが、一同の者と共に  
あるように。」(黙示22：20-21)

せいしよ さいしよ さいご まで よ お  
聖書を最初から最後まで読み終えた  
時のこのまんぞく感は言葉では表わせ  
ないほどでした。そして、なんとうれ  
しかったことでしょう。聖書のすべて  
の言葉は、どんなにわたしの心をみた  
してくれたことでしょう。

はんせい き いま  
半世紀たった今でも、わたしは聖書  
を読むようにはげましてくれたゲイツ  
姉妹に心からかんしゃしています。

いま  
今、わたしは、すべてのみなさんに  
聖書を読むようにおすすめします。

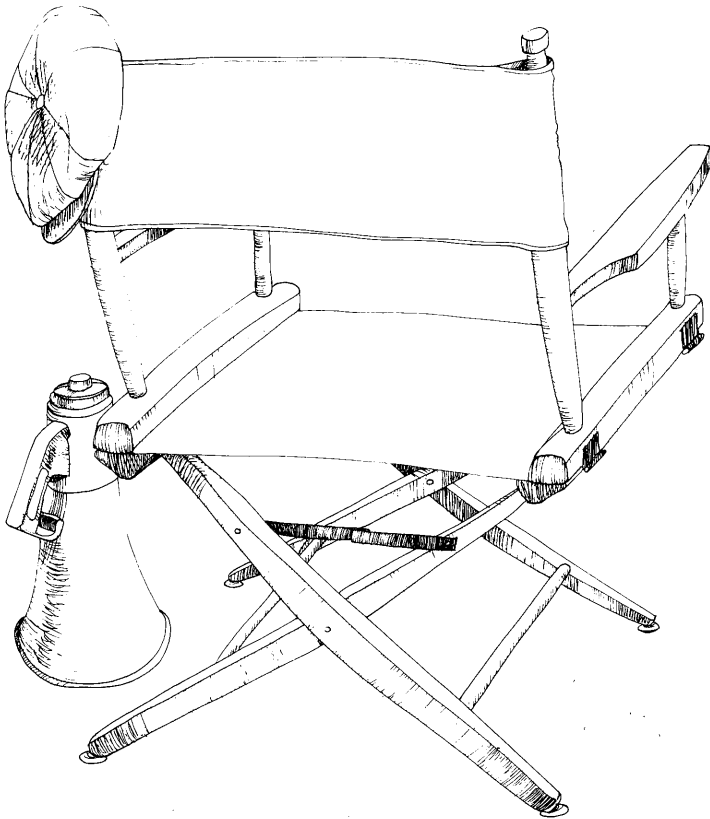
# 私の映画

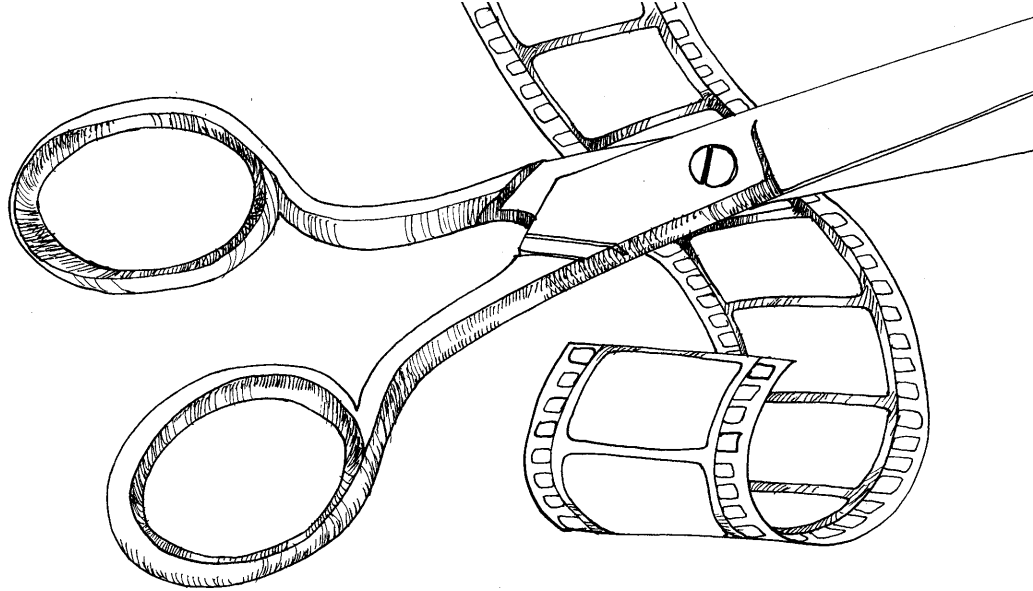
ダン・リンドストーム

**休**暇になると、大抵の人は2、3週間旅行に出たいと思うようですが、私は家に帰れるのがうれしくてたまりません。コンサートになりますと、私たちは何か月も家を留守にしまうからです。そんなわけでソルトレークに帰ってきて、気の合う女性と映画館の前に並び、楽しみにしていた映画を見ようとする時に、ほっとした安らいだ気持ちになれるのかもしれない。

その日の映画は今流行の宇宙科学もので、映画館の前には長い列ができていました。少し時間があつたので、私たちは話をし、いろいろと思いを巡らすことができました。私の頭の中に教義と聖約の88章の聖句が浮かんできました。88章には裁きの日のことが記されています。

108節から110節には、私たちの隠れた行ないが人々の前にあばかれると書かれています。





さらに私たちの心の思いが明らかになるとも述べています。これは、正当な裁きができるように私たちの人生の旅を再現することを意味していることだと思います。

人々がそのことをまるで大スクリーンに写されるパノラマのようだと言っているのをよく耳にしてきましたが、さっぱりピンと来ませんでした。ところがその時、ふとこんな考えが浮んできました。もしも私の人生が映画になったら、今見ようとして並んでいるこの映画のようにわくわくと期待に胸をふくらませて待つことができるだろうか。監督や友達と一緒に見ることができるだろうか。その場に救い主をお招きできるだろうか。

こうしてふとした小さな考えが自分の人生を振り返り、自分が主演する映画のことまで広がって行ったのです。この思いは映画が終わり、デートの相手を家に送った後も、私の頭にこびりついて離れませんでした。とうとう何週間もそのことが私の頭の中を駆け巡り、自分の映画はどのようになるだろうかと気がかりでたまりませんでした。

「映画となれば、主役はだれだろうか。『ダン・リンドストームの生涯』という映画で、

主役になれるのはダン・リンドストーム以外にいないではないか。」これはすばらしいことだ。自分の名前がトップに出る以上、そうそう落胆したり、がっかりしている様も見せられません。大切なのは、カメラが自分の思いや行ないをすべて記録していることを忘れないでいることです。そしていつも楽しく、積極的に良いことをすることです。

「幸福の探求」という映画の中で、私たちはだれでもこの地球上における自分の生活の一刻一刻に責任を負わされると言っています。それはつまり自分が何をしたかということだけではなく、機会を最大限に活用したならばこういうことができたはずだということまでも、映画を通して知らされるということです。そう考えてみると、自分の時間をもっと賢く使わなければ、という気になります。私も聖なる場所に立ちたいからです。

そこで私は映画製作について少し調べてみました。図書館でまずプロデューサーの仕事調べてみると、プロデューサーはたいへんなリスク（危険）を冒しているようです。経費をすべて工面してまさに大きな賭けをするのです。そして映画が当たれば億万長者です



が、失敗でもすれば無一文になってしまいます。しかし、この映画の場合、投資するのは私しかいませんから、私がプロデューサーです。昇栄か、外の暗闇か、あるいはその中間のどこにいくかを自分で演出するのです。どこでロケをし、どんな映画を作るかを決めるのも私です。

製作者はまた脇役も雇います。この映画でも、ある意味で同じことをします。映画の出演者を決め、役の割り振りもしなければなりません。友達も結婚の相手も自分が決めるのです。

どんな映画でも一番も大切なのは監督です。サタンは、折あらば監督になりたいとうかがっています。呼ばれなくても、すきを見て割り込んでくるほどの勢いです。しかし監督したいと思っている方がもうひとりいます。それは聖霊です。どちらの監督もただ働きはしません。サタンは熱心に働くでしょうが、永遠の報酬を要求します。聖霊は正しく清い生活の原則に、きちんと従うことを要求します。どちらの監督にまかせるかを決めるのは自分しかいません。私は聖霊を選ぶだけの知恵と強さを自分が持てるように願っています。

私は自分の映画にはスタントマンがいないこともよく知っています。荒っぽい場面や危険な場面でも代りの人を立てるわけにはいきません。主は私たちがこの地球に来て経験を積むように定められたからです。だれかに肩代りしてもらうことはできないのです。すべて自分で演じなければなりません。

しかし、私たちが望むならば、自分でフィルムを編集することはできます。たとえば「スターウォーズ」のような高度な映画では、いろいろなシーンを様々な角度から撮影して置いて、一番良いカットを使っていくのです。もしどこか具合のよくないところがあれば、

改めてやり直せばよいのです。編集者はどれを捨て、どれを生かすかでとても苦労します。同じように主は私たちの悪いシーンを削ってその部分を埋める方法を、教えて下さいました。それは悔い改めと言われ、ちょうどハリウッドにおいて、はさみとテープを使ってフィルムを切ったり継いだりするのと全く同じようなことをするのです。主の方法で削除したものは永遠に消され、主もそれを忘れて下さいます。(教義と聖約58：42参照)

しかし、もしもそのような編集(悔い改め)をしたところ、フィルムがあまり残らなかったとしたら、どうなるでしょう。そこでさらによいシナリオライターが必要になってきます。一つ一つの場面を良いもの、価値あるものにし、筋書きを立て、クライマックスまで盛り上げていく必要があります。ただすわって休みながら、何かが起こるのをじっと待っている人があまりに大勢いるようです。

日記をきちんとつけておけば、フィルムの進み具合が記録できますし、毎日の目標を書いたり、自分が演じる前にそれを描いてみることもできます。朝の祈りは一日の脚本を準備するよい時ですし、夜の祈りでは自分の映画のある場面を分析することも可能です。毎日美しく力強い話で綴りたいのです。

私はこの地上に来られたこと、そして主から力を与えられ、信頼されていることを心から感謝しております。主は私が自由意志で多くの良いことを成し遂げるように期待しておられます。その意味でも自分の一生を映画に撮ると考えるだけで大きな力が湧いてくるようです。そして仮にそのような映画を製作して、上映するとしたならば、それを楽しみに待てるような自分でありたいと思います。

注：ダン・リンドストーム兄弟は、サンシェード・アンド・レイン・トリオの歌手。教会では七十人であり、無任地宣教師に召されている。この話はあるフェイスサイドで話されたものをもとに編集した。

# 最高の奉仕

クリス・J・ヘンダーソン

**空**軍士官学校に入るのは私の子供の時から  
の夢だった。父は空軍の職業軍人で、夏  
休みになると、私は父のところを訪れ、飛行  
技術を習い、空軍での生活を一通り経験した。  
これほど楽しかったことはない。父母は私が  
幼い時に離婚した。そのため私は父と会うこ  
ともめったになく、このようにして父に会え  
ることが何よりも大きな祝福であった。

高校2年の時、私は士官学校に入学願書を書  
いて出した。勉強は順調で成績も良かった。  
祭司定員会でも活発に働いていたし、その年  
の春には生徒会の会長にも選ばれていた。だ  
んだん自分にも入学の許可が来るのは間違  
いがないと思えるようになってきた。しかし、  
そのような願いが大きくなるにつけ、気懸  
かりなことがひとつあった。それは「伝道に  
出るべきではないか」という思いである。キ  
ンボール大管長は教会の若人は皆伝道に出  
るべきだと勧告している。しかし、自分の  
場合は例外だと思っていた。もし伝道に出  
れば、高卒後すぐ入学する者がほとんど  
の中で、自分が士官学校に入れるチャン  
スも薄らいでくるに違いない。士官学校  
で末日聖徒として立派な生活をすれば、  
これも一種の伝道になるはずではないか。  
そうは思ってみても、私の心の中では  
何かさがさきやきかけていた。私は意  
識してその声に目をつむっていた。

学校が休みに入ると、夏を父と過ごすた  
めに私はバージニア州へ飛んだ。父は教  
会員ではない。父と士官学校に入ること  
などについて話し合ってみて、私はま  
すます希望に胸をふくらませることが  
できた。父の励ましを受けてルイスト  
ンに帰った私は、以前にも増して父が  
誇りにできるような未来の空軍士官候



補生になろうと固く決意した。こうして夏  
の間、伝道に出るという考えもほとんど  
忘れかけていたはずなのに、家に帰  
った最初の日曜日からは、再びあのあ  
りがたくない思いが頭をもたげてきた。  
今から考えてみると、聖霊が私に働  
きかけていたのかもしれない。それ以  
後私は聖霊の力というものに強い証を  
持つようになったのである。ひとり  
でいる時には決まって、士官学校か  
伝道かということに悩まされた。それ  
につれて祝福師の祝福もひんぱんに  
読むようになったが、それには、時  
が来れば伝道するであろうと書かれ  
ていた。それでもなお私の願いは  
士官学校に入ることのような気が  
して、私はますます混乱していった。

そこで、私は自分の気持ちを整理して  
どうすべきかを決めようと思い、以  
前監督であったトルマン兄弟に何  
回も話をした。彼は私の

気持ちを左右するようなことは何も言わず、ただどうすることになったとしても私の決定を支持するだろうと言って下さった。その信頼が、私にとって大きな励ましとなった。私は正しい判断ができるよう導きを与えて下さいと祈った。そしてそれができるという確信を得たのである。

それからしばらく経った1976年10月10日、私は証会に出席していて突然自分は伝道に出るべきだ、士官学校はその後にすべきだという考えが湧いてきた。上着のポケットには、数カ月前に祭司定員会の集会で配られた宣教師の手引きが入っていた。私はそれを取り出して、だれにもわからないようにスペイン語でこう書き付けた。「19歳になったら伝道に出よう。」それからそこに日付けを書き込んで、またポケットにしまった。そのまま半月ほど、そのことを忘れていた。しかし決心はついていた。もう心をわずらわす必要もないのである。

その頃、士官学校の推薦者が発表になった。私もその中に入っていた。友人や教師に、これまで何年間も努力してきたことを、それも達成を目前にして、辞退すると説明するのはかなり大変なことだった。私はトルマン監督と1時間半ほど話をした。監督はこう言った。「クリス、この決定は君にとって非常に良いものだ」と心から思うよ。僕は君が必ず正しい決定をしてくれると信じていた。」彼と話をしているうちに、私はただの義務感でなく心から伝道したいという気持ちが強くなっていった。

次は父に話さなければならない。私はどうしたらよいかわからなかった。とても私の決定を認めてくれるはずがないと思っていた。父にとっては空軍がすべてだし、自分の気持ちを知ったら二度と口もきいてくれなくなるかもしれないと思っていた。私は話をする勇

気とそして父がなんとか受け入れてくれることを願って主に祈った。

その父の声を電話の向こうに聞いた時、私は思わず、受話器を落としそうになった。それでもなんとか父に話すことができた。父は30秒以上も黙っていた。私はてっきり怒鳴られるか、それとも気落ちしてしまうだろうと思っていたので、沈黙はかえって気をそがれた気がした。やがて父が口を開いた。「そうか、クリス。伝道というのはどういうことをするのかい。」父は私が、何をし、しかも期間はどの位で、どこへ行くのかなどを尋ねた。私の説明を一通り聞いた後で、父は「おまえがほんとにしたいことなら、父さんは賛成するよ」ときっぱりと言った。まさに驚くべきことである。言葉も出なかった。それから私は受話器を母に渡して、下の自分の部屋へ行った。

あれ以来、父と私はたびたび手紙を交わし、父は伝道資金の援助までしてくれた。私は以前にもまして父の愛を知り、父への感謝は高まってきた。

父に自分の決意を打ち明けた後も何度か、「士官学校への入学がすぐ手の届くところになりながら、自分から棄てたのではないか。もうこんな機会は二度とないぞ」と考えることもあった。しかしそんな思いもすぐに断ち切るようになった。そしてこう思い始めた。「士官学校に入れなかったって死ぬわけじゃなし、伝道することは主のみこころなんだ。」そう考えるだけで胸がわくわくしてくる。そして私にできるこの最高の奉仕の行手をささげるものは何もないのである。

注：この話はヘンダーソン長老が伝道に出る直前に書いたものである。ヘンダーソン長老は現在、韓国ソウル伝道部で伝道している。

1964年7月5日の日曜日のことだった。これまでエジプトのピラミッドに登り、エルサレムの嘆きの壁をその手で触れ、ヨルダン川を足で渡り、レバノンのバールベクにある古代の道に足を踏み入れ、そしてオリブ山にも立ってみた。そしてきょうはギリシャのアテネを回って、明晩は家族と再会できると思っていた。

遅い朝食をすませて着換えると、電話帳で教会の支部を捜したが、見つからず歩いてアテネの市を見て回ることにした。前日に市内観光はすませていたので、その日は観光客が訪れないような場所に行ってみることにした。

昼近く、私は古びた市アテネの大中央市場アゴラにいた。アゴラ全体はあまりに広過ぎて平地からは眺めることができないので、すべてが一望できそうな南側の険しい丘に登ってみることにした。そして頂上に着き、アテネの市の地図を見てはじめて知ったのだが、この丘こそアレオパゴスの評議所、すなわちかのパウロがアテネの人々に有名な説教をした所だったのである。

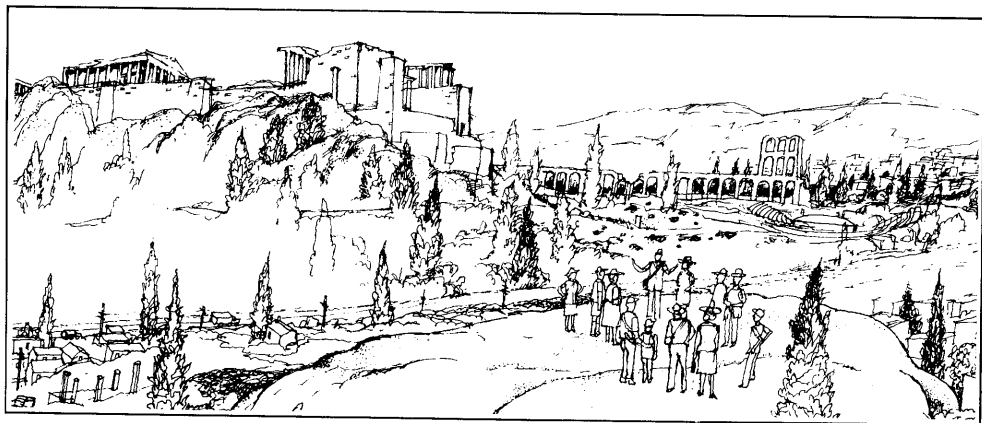
そこで景色を見ていた数人の人たちに混じって突き出た石に腰をおろして下を見ると、アゴラの倒れた円柱や廃墟となった神殿、隣の丘にはアクロポリス、10キロほど向こうには緑のエーゲ海、そしてその上には雲ひとつなく澄みきった青い空が広がっていた。

そんな私の思いを打ち破るように、イギリス人旅行者たちの歓声が私の耳に飛び込んできた。どうしたんですかと尋ねてみると、「クリケットの優勝決定戦でイギリスチームが6点入れたんですよ」という。それから私にも聞こえるようにラジオの音量を上げ、たちまちにぎやかな話があたりに広がった。見渡したところ30人位の観光客のうち、イギリス人とギリシャ人が半々でほとんどが若い夫婦であった。

そうしているうちに、どうも電波の調子が思わしくなくなり、とうとうスイッチを切ってしまった。するとひとりの少女が私にこう言った。「あなたアメリカ人でしょう。なのにクリケットのこと、どうしてそんなによく知っているんですか。」

## 評議所の宣教師

カーク・P・ラベンベリー



私は、モルモン教会の宣教師としてイギリスへ行っていたことがあり、その時にクリケットが好きになったと答えた。するとほかの人が、「モルモン教会と他の教会がどう違うか教えて下さい」と尋ねてきた。

突然、私はそれまでめつたに感じたことのないような、何とも言いようのない気持ちになった。だれかが言った。「話を続けて下さい。おっしゃる言葉は出てきますよ。」こうして私はみんなに言われるままに立って話し始めた。

そしてみんなの様子をうかがいながら、こう言った。「私は末日に回復されたイエス・キリストの教会の会員です。」それから、教会はキリストの名を持つべきであることを指摘し、モルモンはニックネームに過ぎないことを告げた。それから何を言おうかと言葉に窮した私は、アテネの市を見下ろし、あちこちに立っている教会の十字架を見て、こう言った。

「私たちの教会が他の教会とどう違うかというご質問ですが、パウロはかつてこの場所を訪れ、『知られない神』について話しました。この市のどの教会も『知られない神』を祭る祭壇を置いていて、神の不可思議なところがそもそも神なんだと考えているように思います。皆さんは私たちが神を知ってしまえば、それで神もおしまいだと言っています。しかしそれでは、1900年前にこの場所で知られない神を拝んだ人たちと、何ら変わらないのではないのでしょうか。聖書には、永遠の命とは、『唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります』（ヨハネ17：3）と書かれています。」

それから私は、「知られない神」が再び姿を現わし、教会を回復し、ご自身について証する新しい使徒たちを召されたことを話した。そして、かつてない熱意のこもった口調でジョセフ・スミスの話が真実であることの証を述べた。論理的にみても真の教会はひとつしかないことを指摘し、教会には権威が必要なこと、そしてこの神権に基づく権威がこの教

会に回復されたことを説明した。財布の中からデビッド・O・マッケイ大管長の写真を取り出し、彼が予言者であることを証した。その場にいた人たちは皆、現代もそういう霊的な導きが確かに必要だと賛成してくれた。

時間はあっという間に過ぎた。いろいろ質問が出て、私はかつてなかったほどの熱っぽさで教義を説いた。すばらしい経験だった。伝道中に街頭伝道をした時は、ほとんどの人がそのまま通り過ぎてしまい、宗教に関心を持っている人は少ないものだと思っていた。ところがどうだ。そこにいる30人あまりの人たちは皆すわって、耳を傾け、一語一句もらさずに聞いている。彼らは心から福音を知りたいと、願っているようであった。

3時間ほど話し合ったであろうか。夕方の冷気に促されて、私たちはそろそろ切り上げた方がよいと思った。私は自分がこれまで語ってきたことに自分の証を述べ、みんなと握手をした。

目に涙をためてようやくホテルへ戻ると、私は聖書の使徒行伝第17章を開いた。

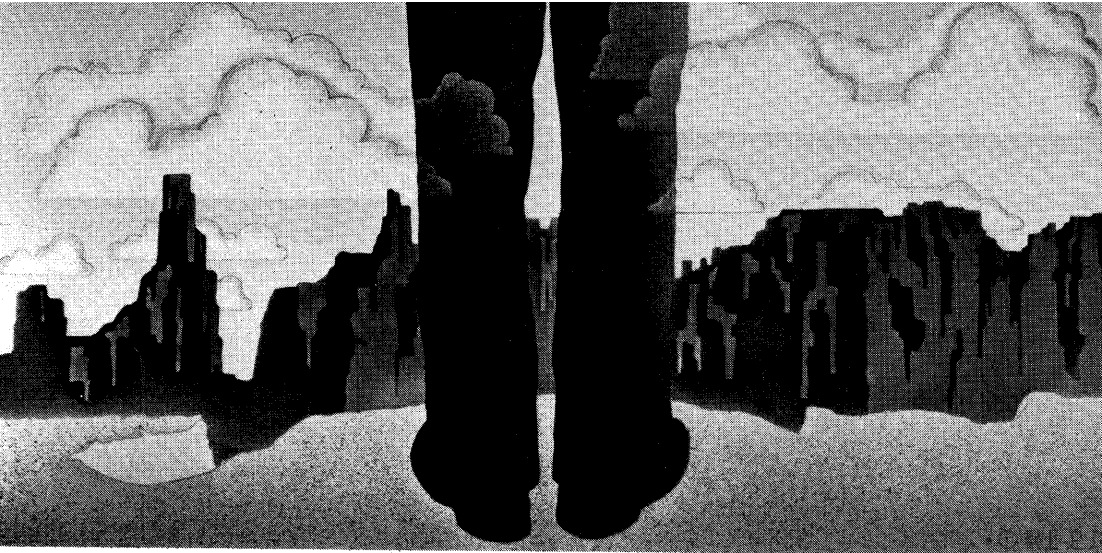
「そこで、彼らはパウロをアレオパゴスの評議所に連れて行って、『君の語っている新しい教がどんなものか、知らせてもらえまいか。

君がなんだか珍しいことをわれわれに聞かせているので、それがなんの事なのか知りたいと思うのだ』と言った。

いったい、アテネ人もそこに滞在している外国人もみな、何か耳新しいことを話したり聞いたりすることのみに、時を過ごしていたのである。

そこでパウロは、アレオパゴスの評議所のまん中に立って言った。……」（使徒17：19—22）

こうして私は古今の最も優れた宣教師のひとつりであったパウロの経験をかいまみる特権に浴したのであった。



## 「経験のない分野に飛び出してみても初めて、 人には進歩があるのだ。」

七十人第一定員会会員  
ロイデン・G・デリック

**周** 囲の山々は明るく、生き生きとした色を呈している。近くの丘陵に散在する黄、茶、灰色の岩、遙かかなたの青々とした山々、これらはみな自然にしか描くことのできない光景である。画家に描かせでもしたら、大袈裟な表現だと非難されるところである。

私は断崖の淵に立っていた。足下には白い砂岩が広がっていた。それが足下で見ると、何の変哲もないくすんだ色でしかないのに、同じ岩が遠くなるにしたがって美しい色を呈しているのが何とも不思議である。「人生もこんなものじゃないだろうか。」私はふとそう思った。

下を見下ろしてみると、遙かかなたにコロラド川が細いグレーのリボンのように深い山峡を縫って流れていた。私は一瞬目がくらく

らっとして、バランスを失い倒れそうになり、思わず身を引いた。上を見ると、200メートル先に峡谷の向い側の崖があった。文明とはおよそかけ離れたこの世界、そう考えてみるだけで怖れが湧いてきた。そして、自分は問うてみた。「私は何というとてもない契約をしたのだろうか。」

私たちはコロラド川の峡谷に鉄橋を架けるという契約を結んでいた。技師たちの企画と計算を頼りに、全く未知のことをやろうというのである。今の私にできることといえば、疑問点をすべて指摘することである。とにかく前向きに努力するしかない。新しい境地を拓こうという時に、組織の長に勇気と判断力が欠けていては、仕事もうまくいくはずがない。これまで長い間仕事をしてきて、一向

に専門家の評価を得ることもなかった私たちにとって、これがまさに最後の砦であった。もう後には引けなかった。「経験のない分野に飛び出してみても初めて、人には進歩があるのだ。」私は、自分にそう言い聞かせて怖れを振り切った。

そうは言っても、この谷に一体どのようにして橋を架ければよいだろうか。まず、私たちは川に細い綱を渡した。それを使って軽いロープを渡し、次に重いロープ、続いて軽いケーブル、重いケーブルと次々に渡していった。こうして兩岸の高い鉄塔から約8センチのスチールケーブルを谷にわたすことに成功した。それから高架軌道方法を使って、組み立てた鉄鋼部品を所定の位置に取り付ける。中には30トンもする機械がある。

アーチ部は結合するまで両側の鉄塔によって支えられ、それには600トンあまりの鋼材が重くのしかかる。しかしアーチが無事に結合すると、その重みは谷の岩床に築いた巨大なコンクリートの土台にもろにかかるようになり、鉄塔は役目を終えて撤去されるのである。

すべての段階に一寸の誤りも許されなかった。どの鋼材もぴったりと合っていなければならない。仕事の手順はすべて入念に計画されていた。細かな予定が立てられ、技師の問題、購入、鋼材の準備、組み立て、保管と輸送、荷下ろし、建設などの調整を行なって必

要な時に必要なものが入手できるように考慮された。人生もある意味でそうなのかも知れない。成功したければ、優れた模範に倣って計画しなければならない。橋を架けるにせよ、人生を切り開くにせよ、大事業になればなるだけ、基準を高く持っておく必要がある。

しかし、今の人はあの日私が立ちすくんだ絶壁を知らない。以前は通行できなかった所が今は車でわずか8秒ほどで通ってしまう。私は仕事の上でいつも危険な崖に立たされた時いつも、人は主の助けさえあれば、やろうと決心したことは何でもやり通せるものだと考えた。ある人にとっては大仕事でも別の人にとっては平凡な仕事だということもある。また現在はありきたりのことだが、かつては想像もつかないような大事業であったということもある。

私たちは皆、だれしも人生で窮地に立たされる時がある。未知の明日が疑いと恐れを生むのである。救い主は最後の晩餐で弟子たちに別れを告げる時、弟子たちの心に生じた不安を感じ取っていた。救い主が去った後もみ業を続けなければならない。しかし、彼らはまだそのような経験をしたことがなかった。主は言われた。「あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。」(ヨハネ14:27)

福音が回福された後も、救い主は再び末日の弟子たちにも業を進める責任を説き、彼らの怖れを感じ取って「怖るな小さき群よ、わが

経験のない分野に飛び出して初めて  
人には進歩があるのだ。

来るまで王国は汝らのものなり」(教義と聖約  
35：27)とされた。

主はニーファイに、それまで一度も経験した  
ことのないことをせよと命じられた。船を  
造って海を越え、新しい約束の地へ行くこと  
である。ニーファイはどう始めたらいいか幾  
らかの知識を持っていた。しかし何よりも大  
切なことはニーファイが霊的な強さと主に対  
する絶対の信頼を持っていたことである。兄  
たちから非難され、船など造ることはできな  
いと笑われ、心に疑いと恐れが生じたことも  
あったに違いない。それでもニーファイは強  
い信仰を持ってこう言った。「もしも神が私に  
するように命じたもうたならば私はあらゆる  
ことをすることができる。もし、神が私にこ  
の水よ土になれと言え、と命じたもうならば、  
水は土になるから、私がもしそう言えばその  
通りになる。

さてもし、主がこのように偉い力をもちた  
もうて、かほどに多くの奇蹟を世の人々の中  
で行いたもうているならば、どうして私に一  
隻の船を造ることをお教えになれないであろ  
うか。」(I ニーファイ17：50—51) この自信  
に満ちた言葉通り、ニーファイと兄たちは主  
の助けによってアメリカまで達することので  
きる立派な船を造ったのである。

主は私たちに、できる限りの準備をせよと  
教えておられる。末日の弟子たちに、「汝らに  
備えあらば怖ることなからん」(教義と聖約

38：30)とも言われた。使徒パウロは示現に  
よって主から召され、その後慣習通りアラビ  
アで3年の歳月を送り、教えを宣べ伝えるた  
めの備えをした。主は次のように言って、私  
たちに備えることの必要性を説かれた。「わが  
言を宣べんと求むるなかれ。然らずしてまず  
わが言を得んことを求めよ。然る後、汝の舌  
ゆるまり、……」(教義と聖約11：21)

自分自身を備えたならば、次に必要なこと  
は信仰の原則である。自分で備えをしたので  
あるから、それに対して何を命じられてもで  
きるという信仰である。強靱な信仰の持ち主、  
使徒パウロはこう述べている。「わたしを強く  
して下さるかたによって、何事でもすること  
ができる。」(ピリピ4：13)この言葉は、パ  
ウロの力の源を示すものである。

準備、信仰、大胆さ、こうして私たちは一  
つ一つ、一日一日と高いものを成し遂げるこ  
とができるようになるのである。そして経験  
以上のことを行ない、今まで行なったこと  
のないようなことを成し遂げるのである。私  
たちの行手、遙かかあなたに広がる地平線  
を乗り越えられるのは、信仰と勇氣と主への  
信頼を備えた人々である。そのような汗と  
努力の結果、もたらされるものが個人に  
対する満足感であり、人類に対する貢献  
となって実を結ぶのである。



# 指導の基本 個人への関心

ウイリアム・G・ダイヤー

**職**場、教会、家庭を問わず、どこの組織にあっても指導者に問われる一番大きな課題は、自分の部下や同僚に、自分がいかに個人的な関心を抱いているかを伝えることである。

たとえ教会であっても、仕事を行なって目

標を達成しなければ、組織の存続はおぼつかない。指導者は、どうしても実務中心の活動をおろそかにできなくなってくる。そこで活動を計画し、プログラムを作成し、資料を整え、割り当てを与えてフォロー・アップできるように配慮する必要がある。その際、第一

個人的な話し合いをする  
機会を十分に持つ



の関心が仕事を行ない責任を果たす人々にあることを教え、その雰囲気の下で行なう必要がある。上役は部下よりも仕事の方が大切であると思っていると、部下が感じ始めたら、彼らの勤労意欲は減退する。

このバランスが大切である。すなわち、よく計画し、組織立て、しかも参加する人がよく理解され、必要とされ、積極的に参画していると感じられる状況の中で立派な仕事を行なうことが必要である。

教会では、このバランスがどのようにとられているか考えてみよう。

#### 1. 責任に召す

召す人は、その責任の重要性や資格、割り当てなどについて強調し過ぎるあまり、召された人の必要、関心、恐れ、疑問などに応えることをおこたってはいないだろうか。

#### 2. 面接

ホームティーチャーや組織で働く人々と面接をする時、彼らの内面的な関心について触れることなく、担当家族や組織について尋ねるだけで終わっていないだろうか。また、神殿推薦状の面接などで面接時間の割当表を使って、短時間の面接で終らせていることはないだろうか。会員たちの中には、これが監督から個人面接を受ける唯一の機会となっている人もいる。教会員一人

一人が監督から真心を持って関心を寄せられていることを知るだけ十分な時間をとっているだろうか。

#### 3. クラスの活動

福音を教える教師の中に、レッスンの方が生徒よりも大切であると感じさせる教師はいないだろうか。レッスンが一般的になり、生徒の関心とは全くかけ離れた話に終始していることがよくある。熟練した賢明な教師は、生徒たちが福音に対する疑問や現実の問題を自由に話せるような雰囲気を創り出すことができる。

#### 4. 割り当て

定員会やワード部の指導者は、当人の必要を考慮して割り当てを与えているだろうか。私はまだ、定員会会員の前に座って、次のように述べている指導者をあまり見ない。「私たちは今こういう責任を割り当てられています。皆さんのご都合はいかがですか。この割り当てを皆さんの負担とならないように達成するには、どのような計画を立てればよいと思いますか。割り当てを果たす上でよい提案があれば、出して下さい。

#### 関心を示す方法

教会の指導的立場にある人が個人への関心

---

どこの組織にあっても指導者に問われる一番大きな課題は、自分の部下や同僚に、自分がいかに個人的な関心を抱いているかを伝えることである。

を示し、皆が受け入れられていると感じている雰囲気を作り出すにはどうすればよいだろうか。

#### 1. 十分時間をとる

教会活動の相互調整をあまりに急ぎすぎのために時間的余裕がなく、感情だけで、「みんな忙しいのだから、とにかく急いで片付けてしまおう」と言ってすましてしまうことが多い。責任を与える場合の面接や口頭評価はよく計画し、十分に時間をとって行ない、まごころから感謝の気持ちを表わし、相手の個人的な関心をとらえ、責任だけでなく個人的な問題についても話し合うべきである。

#### 2. 個人的な事柄について尋ねる

いろいろな理由から、人は一般に個人的な問題について話し合うことを敬遠する。仕事について話している方が無難のように思われるからである。しかし、そんな時でも次のように言えば、個人的な問題に容易に入ることができるのではないだろうか。「ホームティーチングの割り当てについて、どのように感じているか話していただけますか。何か不安やわだかまりがあれば、ぜひ話して下さい。また改善点など気づいたところがあれば、喜んでお聞きしたいと思います。」「いかがですか。私がお助けできる問題や疑問、苦情があれば、遠慮なくおっしゃって下さい。」指導者が気づいている点で心配していることがあれば、そこから、話し始めてもよい。

#### 3. 理解し合う心を持って聴く

相手が心にかかっている事柄について話し始めたら、指導者はとにかく耳を澄ませて聴き、理解しようと努めることである。指導者は自分の考えを述べて相手の話を中断してはならない。「まさか、そんなことはないでしょう。」「あなたは、私たちが行な

うとしていることをまだ十分理解していないようです。」「私があなたの立場にいたらどうするか、お話ししましょう。」

こう言って、指導者は心を込めて、相手の立場を理解しようと耳を傾ける。つまり、相手の立場にたつて問題や状況を分析し、処したかを理解するように努めるのである。そして、相手の必要を実際に満たす助けを与える。

#### 4. 喜んで物事を行なう

本当の問題を打ち明けられた時、指導者に共通して言えることは、知らず知らずのうちに「どうお助けしたらよろしいでしょうか」と聞き返していることがある。この質問は、相手をしばしばジレンマに陥れる。相手は助けを求めているのではないかもしれない。また、どうしたらよいかわからないのかもしれない。相手はとまどい、いたたまれなくなって、「いいえ、助けて下さい」といっているではありません」とか「何をしてもらったらよいのか、私にもわからないのです」と答えるしかなくなってくる。何ができると尋ねるのでなく、指導者はとにかく何かをすることである。相手の話を理解し、関心を示し、同情する気持ちを表わすことである。また、愛や感謝の言葉を述べることもできる。次のように言って行動を促すのもひとつの方法である。「ホームティーチングでとても苦勞なさっているようですね。来月は私が一緒に訪問して、様子を見てみたいのですが、よろしいでしょうか。」「次の時、私にレッスンを教えて下さい。そして、あなたは後に座って、クラスを見て下さい。」「それは難しい問題ですね。監督にお話して意見を聞いてみましょう。」

私たちが心から関心を持っているならば、それを示す方法は幾らでもある。

# ウィニー先生

R・ブルース・リンジイ

**私** はすべての末日聖徒の若者が自分の生涯でウィニー・ガンダーソンのような人に会えないのが残念でたまらない。そこへゆくと、この30年間ユタ州のテイラースビルで育てられ、大勢の子供たちと一緒に毎週欠かすことなく初等協会に来て、この古ぼけたテキストを抱え、厳しい眼差しの、心の広いウィニー先生のもとで指導を受けられたことは何という幸福であろうか。

ウィニー先生は子供たちがとても好きで、特に男の子をかわいがった。みんなもそのことはよく承知していて、時々私たちはそのことをよいことに、レッスンにない活動までもさせてしまったのではないかと思うようなことがあった。

決してレッスンがおもしろくなかった訳ではない。それどころか、ウィニー先生のレッスンは何か特別なものがあった。

特に荒野をわたる開拓者の実話を語る時など、毎年20人余りの11歳の少年の心を上手に捕えられる先生はウィニー先生をおいてほかにいなかったのである。

確かにウィニー先生は教会歴史が好きだった。彼女ほど開拓時代の聖徒たちの精神を生き生きと、上手に伝えられる教師もいなかった。そして子供たちがウィニーと一体化されているので、どこまでが歴史上の事実で、どこからがウィニーの話なのか、区別できない程である。

例えば、私がウィンター・クォーターズのことを考える時、必ずそこにウィニーの姿がある。そしてウィニーの顔を見るたびに、開拓者の時代に厳寒の冬を耐え抜くために培ってきた人々の力強さの一端を知る思いがしたのである。

私はよくウィニーがソルトレーク盆地の穀

物を食い荒らすいなごを追っ払ったり、牛にむちをあてて平原を横切っているところ、カートランド神殿で使うモルタルの中に入れるために、自分が大切にしている陶器をすりつぶしているところなどを思い浮かべる。彼女こそまさに開拓者の姿そのものだった。

あるいは私たちの中にもそうした開拓者を育てようとしていたのかも知れない。クラスの呼び物は、真夏の暑い日に、古い砂利道を横切って歩く歩行訓練である。私たちは赤い幌馬車を仕立て、それに長いドレスとボンネットを着けた少女たちを乗せた。そして馬はたいていどこから借りてきたシェトランド産の馬であった。

そして夕方になると、ウィニーの家の裏庭に設けた「約束の地記念碑」のところに集合して、塩漬けにした豚肉や乾パンを食べ、開拓者の歌を歌った。

時にはウィニーの家に上がり込んで冗談を言ったり、またクラス委員会を開くこともあった。ウィニーは、教えるのは毎週のレッスンだけではないと思っていた。

そして何年経っても、私たちへの関心を失なうことがなかった。若者たちは伝道に出る前の最後の話の中で、決まってウィニーに心からの感謝の言葉を述べた。そして彼女はいつも絶やすことなく伝道中の若者に励ましの手紙を書いてくる。

私は14歳の時、幼い子供たちに予言者ジョセフが森で祈ったのが何歳かを教えるために、クラスへ招待されたことがあった。そして彼女が当時の状況を刻明に描き始めると、あたかも同じ光が私たちのクラスにおいてきたかのように感じたのだった。実際、ある意味で光がおりてきたのかもしれない。

こうしてウィニーの光は子供たちに小さな絶えることない証の火を燃え立たせた。教師ほど次代を担う若人に大きな影響をもたらす者はない。そしてウィニー先生のようにすべての教師がそのことを理解して下さるように願っている。

# 指導者に従う



ポイド・K・パッカー

きょうの私の話の内容を一言で表わすとすれば「指導者に従う」ということである。私の話にはまわりくどい表現や説明が出てくるが、根本は「指導者に従う」ということであり、この言葉こそ、私があなた方に与えることのできる最も大切な勧告である。

マタイ伝第26章の最後の晩さんの場面から一つの教訓を導き出すことができる。21節を引用してみよう。

「そして、一同が食事をしているとき言われた、『特にあなたがたに言うておくが、あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切るうとしている。』」

ここで考えていただきたいのは、これらの人々が使徒であったことである。彼らは使徒として召されるにふさわしく成熟していた。私がいいつも興味をそそられるのは、使徒たちがそのとき互いにひじで突き合ったり、「裏切り者はあのユダにきまっている。そういえば、この頃何だかおかしかったなどと言ったりしなかったことである。これは使徒たちの人柄の何たるかを表わすものである。事実次のように記録されている。

「弟子たちは非常に心配して、つぎつぎに『主よ、まさか、わたしではないでしょう』と言い出した。」(マタイ26:22)

私たちには勧告を簡単に聞き流してしまう傾向があるように思われるが、きょうは、しばらくの間この使徒たちのような態度で、次のように自問してみていただきたい。「私には改善しなければならない点はないだろうか。私はこの勧告を心に留め、実行すべきだろうか。弱さのゆえに指導者に従うことができない人、またわざと従おうとしない人がいるとすれば、主よそれは私でしょうか。」

末日聖徒イエス・キリスト教会には、他の教会にみられるような職業牧師はいない。しかしそれ以上に大切なことは、いわゆる「平信徒」がいないことである。男性は神権を受け、教会の任務を遂行することができる。また男性も女性も共に多くの補助組織で奉仕することができる。この責任は自分だけでなく、どのような人にも与えられ、またこの責任には権能が伴う。この権能を否定したり、無視したりする者は多い。しかしながらその権能は、人間がそれを支持する度合いによって測られ

るのではなく神がその権能を認め、尊重されるかどうかによるのである。

信仰箇条の第5条には次のように記されている。

「われらは、福音を宣べ、且つその儀式を執り行うためには、啓示と、権威ある者の按手により、神によりて其任に召されねばならぬことを信ず。」

この第5条には、福音が真実であるという重要な証拠が含まれている。私は、「神によりて其任に召されねばならぬことを信ず」という文の中の「ねばならぬ (must)」という言葉に興味を覚える。ご存知のように、私たちは普通、その言葉を教会で使うことはない。これまで指導者から「あなたは今より後、これこれしかじかのことを行なわなければならない」と言われたステーク部長がいるだろうか。むしろ、こうした場合は「よくよく考えたのですが……してはどうでしょうか」というのが普通である。

残念なことに、読むときは書いてある通りに読むが、それが行動に移るとなると次のようになってしまう人が多い。

「われらは、教会の高職に任命されるに当たり、状況に応じて靈感を受くと信ず。しかしながら、通常、教会の役職への任命に際しては、人間の考えにより決定が下されると信ず。」

こうした立場をとる人は、監督やステーク部長、教会幹部など教会の指導者の人間的な面に弱さを見つけようとしている人たちである。彼らは時折、指導者の中に不適切な言動を見出し、それを指導者が人間的な考えで事を行なっている証拠だと主張するのである。

また、ある指導者は喜んで支持するが、他の指導者に対しては疑いを抱いたり批判をしたりする人がいる。

また中には、教会の高い役職に召されればすぐに忠実になり、その職に必要な働きを十分になすことができている人がある。また一段と力が増して、今までできなかったことでもできるようになると思う人がいる。

しかし、あなた方は小事に忠実でなければ大事に忠実であることはできないことを覚えておかなければならない。あなたが王国である教会で行なわなければならない、いわゆる「ささいな、つまらない」仕事を引き受けなければ、大きなチャレンジに満ちた奉仕をする機会はないだろう。

大管長や教会幹部は支持するが、自分のワード部の監督は支持できないと言う人は、思い違いをしている。自分の所属しているワード部の監督やステーク部長を支持しない人は、結局は大管長を支持していないことになるのである。

私の経験からも言えることだが、助言を求めのに監督のもとに行かないと言って私たちのもとに来る人は、進んで監督の助言を受け入れようという気持ちのない人である。ということは、教会幹部の助言を進んで受け入れようとする気持ちがないか、またはそうできないかのいずれかである。事実、主からの靈感は監督に与えられる。従って正しい助言を与えることのできるのには監督である。

兄弟姉妹の皆さん、教会員が助言を求めて私たちのところに来るのは何と無駄なことであらうか。中には、自分がとるべき行動について何かを感じ取る人もいるかもしれない。それを靈感と呼ぶのは勝手である。彼らは監

督のところへ行くようにという助言に一応は耳を傾ける。しかし、すぐにその助言を無視して、確かに迷うとわかっていながら、自己の望む方に走ってしまうのである。

また中には、私たちの特権をうらやんで、神権の権能に従うことは人の意志をはく奪することだと思っている人がいる。兄弟姉妹の皆さん、自由が従順を通して得られるものであることを知ってさえいれば、問題は起こらないのである。

神権の権能にいつも快く従うことは決して容易なことではない。ここでこのブリガム・ヤング大学の創設者、カール・G・メーザー博士の経験をお話したい。メーザー博士はドレスデンのある学校の校長をしていた。非常に優れた、身分の高い人であった。1856年、メーザー兄弟は妻と幼い息子を連れ、ショーンフェルト兄弟その他幾人かの改宗者と共に、ドイツを後にシオンに向かった。

一行が英国に到着したとき、メーザー兄弟は突然、英国で伝道するようにという召しを受けた。メーザー兄弟はショーンフェルト兄弟たちが自分たちと別れてそのままアメリカに向かったことで非常に落胆した。英国に留まって、教会の召しを果たしている間、彼は以前の地位から見れば行なう必要のないような、つまらない仕事をたびたびしなければならなかった。

ドイツの上流階級の慣習によれば、メーザー兄弟のような地位にある人が、荷物を抱えながら町を歩くなどということは考えられないことだった。ところが長老たちが汽車に乗るときにカバンを運ぶように命じたのである。メーザー兄弟は、誇りが大きく傷つけられるのを感じた。スーツケースを運ぶことなど全

く耐えられないことだった。彼の妻もまた心を傷め、夫がそうしなければならぬことに怒りさえ感じた。

しかし彼の最後の言葉はこうだった。「そうだな。彼らは神権者だ。彼らが私に行けと言うのなら、私は喜んで行こう。」彼は自分の誇りをかなぐり捨てて、カバンを運んだのであった。

私はここで、このことは決して自分の自由意志を取り上げられたことにはならないと付け加えておきたい。メーザー兄弟が示した従順は、彼の感情の表現として非常に勇気あることであった。

教会のワード部やステーキ部であなた方を管理する人々は一見普通の人のように見えるが、どこか違っている面がある。それは、神権の権能を身に受けているからであり、靈感がその召しに伴うからである。

私はあなた方が、ステーキ部を組織する責任を与えられた教会幹部と行動を共にできたら素晴らしいと思っている。私には何度もその経験がある。そして、いずれも期待に違わぬものであった。少し前のある日曜日の夜、あるステーキ部の組織を終えて車で帰る途中であった。マリオン・G・ロムニー長老と私は沈黙したままだった。疲れていて、話をする気持ちにもなれなかったのだと思う。突然ロムニー長老がこう言った。「ボイド、この福音は真実だよ。」(十二使徒の口からこのような言葉を聞くのは興味深いことである。)そして彼はこうつけ加えた。「これまで48時間以内に起きた出来事は、福音が真実でなかったら経験できなかっただろうね。」

私はその2日間の出来事の一つ一つ回想していた。私たちは面接をし、ひとつの決定を

した。ステーキ部の神権指導者と面接をした私たちは、一人一人にだれを新しいステーキ部長にしたらよいか提案してもらった。ところが全員が同じ人を提案したのである。彼らが言うには、経験も豊富で家族も皆信仰深く、すべての面においてよく気がつき、思慮分別のあるステーキ部長としては理想の人だとのことだった。面接があと2、3人で終りというときに、私たちはこの兄弟と会った。皆の評価通りの人であった。面接を終えて部屋を出ると、ロムニー兄弟は私に尋ねた。「さて、どう思いますか。」

私は、自分の感じではまだ新しいステーキ部長となるべき人は出てきていないのではないかと答えた。

ロムニー兄弟は私の意見に確信を得て、こう言った。「たぶんもう少し面接を続けなければなりません。もしかしたら現在の神権指導者の中にはいないかもしれませんが、その前に残りの神権指導者と会ってみましょう。」

また面接が始まった。その日面接したほかの神権指導者の場合と同じように、同じ質問、同じ答えであった。面接を終えて、ロムニー兄弟がこう尋ねた。「さて、今の人はどうですか。」

私は言った。「私の感じでは、もう面接をやめてもいいと思うのですが。」ロムニー兄弟も同じ思いであった。なぜなら、この人こそ自分がステーキ部を管理する人としてすでにそのみ手を按かれた人だと感じたからである。

では、どうしてそれがわかったのだろうか。それはふたりが、同時に、何の疑いもなくその人だということがわかったからである。事実、私たちに課せられた責任はステーキ部長

を「選ぶ」のではなく、主が召された人を見つめる」ことにあったのである。主ははっきりと、誤解のないように語られる。「人は予言により召されるのである。」

私たちがどれだけ大きな献身を表わすことができるかは、召しにどのように答えるかによって決まる。

初期の教会員はその信仰を何度も何度も試された。1856年の「大会報告」には次のように記されている。これは、当時の第一副管長ヒーパー・C・キンボール長老の言葉である。

「私はこれから皆さんの前で伝道に行くよう選ばれた人の名前を発表したいと思う。ある人はヨーロッパに、あるいはオーストラリアに、さらには東インド諸島に行くようになるだろう。またある人はラスベガスや北部地方、フォート・サプライに赴き、その地域に定住している人々を強めることになる。」

このような発表は、しばしば聴衆の教会員にとって全く思いがけないことであった。しかしそのような召しに答えるに当って、彼らが心に抱いたのは、その信仰のゆえに「いつ、いつ行けばよいのでしょうか」という問いであったにすぎないと、私は思う。今日でも同じような召しがあるかどうか知らないが、そのような召しがなされたとすれば、多くの人から「いつ」ではなく、「どうして? どうして私が行かなければならないのですか」という答えが返ってくるであろう。

私がたまたまヘンリー・D・モイル副管長の事務所に行ったとき、電話のベルが鳴った。それは、モイル副管長がその日朝早く申し込んでおいたものであった。一通りの挨拶が終わると、モイル副管長はこう言った。「いつか近いうちに、仕事でソルトレーク・シティー



に来られるようなことはありませんか。お話したい大切なことがありますので、奥さんと御一緒に来ていただきたいのですが。」

遠く離れていたにもかかわらず、彼が突然の仕事でソルトレーク・シティーにやって来たのは、その翌日の朝であった。私はそのときもまた、モイル副管長の事務所に居合せた。モイル副管長はその人に、ある伝道部を管理するよう召されたことを告げて、こう言った。「別に急いでお決めになる必要はありません。ただこの召しに対するおふたりの気持ちが決まり次第できるだけ早く、そうですね、一兩日中にでも御返事下さい。」

互いに見つめ合ったふたりの間には沈黙の会話が交わされた。そして、ふたりだけにしかわからないような、かすかなうなずきがあった。彼はモイル副管長の方に向き直ると、次のように答えた。「副管長、何と申し上げてよいのかわかりませんが、今この場で答えられなければ、2、3日待っていただいても同じことです。私たちは召されたのです。ほかに何と答えられるでしょう。もちろん、その召しを受けたいと思います。」

モイル副管長はやや落ち着いた口調でこう言った。「そうですか。おふたりがそのように思っておられるのであれば、実は、この件について急ぐことがあるのです。それでは、3月13日に、西海岸から船で発つということで準備していただけないでしょうか。」

彼は息をのんだ。なぜなら、出発の日までわずか11日しかなかったからである。彼はちらっと妻の方を見た。再び沈黙の会話が交わされた。そしてこう答えた。「わかりました、副管長。その日に間に合うように致します。」

副管長は尋ねた。「仕事はどうなさいますか。あなたが経営しておられる穀物倉庫は？それに家畜、その他家屋などはどうなさいますか。」

「わかりませんが、何とか都合してみます。きっと万事うまくいくと思います」その人は答えた。

私たちはこのような偉大な奇跡を、毎日毎日、何度も何度も信仰深い人々の中に見ている。しかしながら中には、召しに応え、召された人を支持するという信仰を持っていない人もいる。

あなた方にできることが幾つかある。どうか自分自身の心を探っていただきたい。あなたは教会の指導者をどう思っているだろうか。監督を支持しているだろうか。ステーク部長はどうだろうか。教会幹部を支持しているだろうか。どっちつかずの人々や批判的な人々の仲間ではないだろうか。それとも悪口を言ったり、召しを断ったりする人々ではないだろうか。「主よ、それは私でしょうか」と尋ねてみていただきたい。

責任ある神権の召しに働いている人を批判することは止めていただきたい。自分が忠実であることを示しなさい。人を支持し、祝福

---

「私には改善しなければならない点はないだろうか。私はこの勧告に心を留め、実行すべきだろうか。弱さのゆえに指導者に従うことができない人、またわざと従おうとしない人がいるとすれば、主よそれは私でしょうか」と自問してみていただきたい。

するという気質を養っていただきたい。また祈っていただきたい。あなたの指導者のために絶えず祈っていただきたい。

教会で奉仕する機会を断ってはならない。あなた方が権能をもつ人からある責任に召された場合、答えは一つしかない。もちろん、あなた方は自分の置かれている状況についてはっきりと説明することができる。しかし、監督またはステーク部長からの召しとして与えられる責任はすべて主から与えられる召しである。信仰箇条にはそのように定義されており、私はそれが真実であることを証する。

また一度役職に召されたなら、自分でおしはかって、解任の日を決めてはならない。解任は新たな召しを意味するものである。人は自らを教会の役職に召すことはできないのに、なぜ自らを解任する権利を持っていると考えるのだろうか。解任は召しの場合と同じ権能によってなされるべきである。

己が任命せられたる務めを全く勤勉に勤むべし。(教義と聖約107:99) 怠惰な僕とならないように。また、時間に正確な、信頼に足る忠実な人となっていただきたい。

あなた方は与えられた召しに関して知る権利を持っている。自分に課せられた責任について、いつも謙遜に、敬虔深く祈っていただきたい。ふさわしくあるように標準を守り、召しに伴う責任について主と交わることができるようにしていただきたい。

話を終えるに当って、私はもう一度皆さんに申しあげたい。「指導者に従いなさい」と。あなた方は主の僕が与える勧告を心から聴くことも聞き流すこともできる。あなた方が何を得るかは、指導者がメッセージをどれだけ準備したかではなく、あなた方がメッセージ

に対してどれだけ準備するかによるのである。

教義と聖約1:38—39には次のように記されている。

「主、われ言いたることは、われ言いたるなり。われ言い逃れせず。天地は過ぎ行くと、わが言は過ぎ行くことなくして成就すべし。わが声にて言わるるも、僕らの声にて言わるるもみな一つなり。

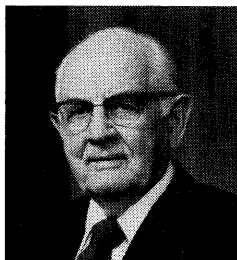
見よ、みよ、主は神にして『みたま』は証す。また、この証は真実にして真理は永遠に変ることなし。」

再びカール・G・メーザーのことに戻るが、あるとき彼は若い宣教師の団を率いてアルプスを越えようとしていた。そのとき、杭が点々と山の上まで、雪の表面から少し顔をのぞかせて立っている光景が、急な山道を登る彼の目に入った。それは険しい山道を進む人に安全な道を示すためのものだった。

これに心を打たれた彼は宣教師たちにこう語った。「兄弟たち、ここに神権が立っている。ここにあるのはただの杭だ。だが、今この場にこうして立っているから価値がある。なぜならこの杭の示す道から離れたら、私たちは遭難してしまうのだから。」

兄弟姉妹そして学生諸君、私は証したい。この教会にあって幹部はしかるべくしてその地位にいる。すなわち予言によって神に召されているのである。若いときにこの教訓をよく学ぶことができるように。そうすれば、どんなチャレンジにあっても忠実な生活ができるよう。願わくは教会幹部の言葉によく従うことができるようイエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。(ボイド・K・バックナー『指導者に従う』「年度講話」1965年3月23日)

# キンボール大管長のビジョン



「全世界に出て行って、全ての造られたものに福音をのべつたえよ」

マルコ16：15

「先年、農業科学者たちが1エーカー当り、通常米の約8倍の収穫をあげることのできる新種米の改良に成功したと伝えられたことがあった。さらに驚くべきことに、この新種米は3毛作が可能であり、結果的に通常米の24倍の収穫をあげられると言われている。この食糧不足の時代にあって、何という画期的な出来事だろうか。これほどの偉業を成し得た人々にもたらされた満足感はいかばかりかと想像もつかないほどである。

それでは私たちは、宣教師をよく訓練し、現在の8倍、あるいは24倍の改宗者をあげることはできないものだろうか。」

「私は、すべての宣教師が伝道期間中に、1000名以上の人々を教会に導くよう期待している。」

キンボール大管長の上の言葉から、私たちは今、大勢の改宗者を教会にもたらすべく、その方法、方策を見いださなければならぬ時にきていることは明白である。

---

## 日本伝道へのメッセージ

### ○エズラ・タフト・ベンソン長老（1970、総大会にて）

主の時をもってすれば、扉は今や開かれ、アジアにおいて主の業が行なわれる時である。私は訪問するたびに、この地が発展し、成長を遂げるだろうという靈感をうける。

### ○ハロルド・B・リー長老（1954、総大会にて）

神のみ手のしるしが、今や極東の地にある。全能の神の業は非常な勢いで進展しつつある。

# 1980年を躍進の年にしよう



日本・韓国地域代表役員  
菊地良彦長老

新しい80年代の夜明けを迎えるにあたり、末日聖徒一人一人に寄せるスペンサー・W・キンボール大管長の期待をお伝えできることをうれしく思います。

スペンサー・W・キンボール大管長（聖められた方）の教えを日々の生活の中に実行することこそ、私たち聖徒が高められる、最もふさわしい道なのです。彼の言葉は、私たちの眼を明るくして下さるキリストの光からくる言葉であり、私たちの理解を増し加える力となる言葉です。この末日の聖徒たちが、生命に力を得て、聖められ、幸福で美しい生活をし、永遠の生命に至る「生命の道」を歩むには、現代靈感されて語る予言者の声に耳を傾けることが必要です。予言者のみ言葉は、私たちの魂を生かす力となるからです。キンボール大管長が予言者として召された6年間に、特に強調されておられる点を次ページに箇条書きにしてみたいと思います。

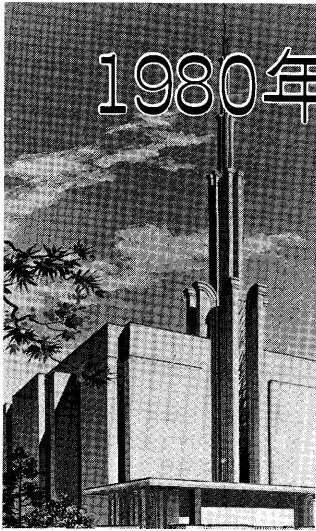
兄弟姉妹、このほかに150位あります。全部を一度に守ることは、不可能でしょうが一步一步、歩みを続けることはできるはずで。日本の聖徒が、「個人として、また全体として前進するためには、これまで時には忘れることがあった基本原則に、今こそ心を集中しなければならぬ」（スペンサー・W・キンボール『より高い地点に向かって前進しよう』「聖徒の道」1979年10月号、p.116）

また大管長は、こういわれています。「私は、主の教会は、今や靈性の飛躍の間際にあると思う。私たち一人一人の靈的な成長こそが、王国が目に見えて大きく成長する鍵である。……兄弟姉妹、私たちが靈的成長の一步を踏み出すことをためらって家族や隣人に奉仕する新たな機会を逃すことないようにしようではないか。主は私たちに力以上のものを求められず、まだ用意のないことを強いられない。しかし、また、私たちは歩む用意がある時に、いつまでも待つてはならない。」（同上、p.117）

また「私たちは何もかもが許される世界に住んでいるが、許す世界、すなわち、退化する社会に埋没しないにはっきりとした意識を持つ必要がある」とキンボール大管長は語っておられます。

1980年代は、日本の国にとって著しい飛躍の年となるに違いありません。あるいは世界の義の旗印となる基礎固めの年かもしれません。神殿の完成、神殿のオープンハウス、教会設立150年祭、神殿の献堂式、地域大会、と大きな行事が予定されています。伝道活動はなお一層進展し、1979年の3倍にもなるはずで。願わくは、聖徒一人一人が、天父の律法に厳格に従い、天のみ声に耳を傾け、指導者を支持し、公平と正義と慈悲の清い道を前進されますように、イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

1. 熱心に祈り、聴く耳を養う。
2. 安息日を聖く過ごす。(買い物はしない)
3. 系図を探索し、神殿にしばしば参入する。
4. 什分の一を正確に納める。
5. 末日聖徒の女性は愛に満たされるべきである。
6. 日記を付け、家族の歴史を編纂する。
7. 人格を高め、親切、慈しみ、寛大、非利己心、思いやり、感謝、高潔、公平などの諸徳を身につける。
8. うわさ話をしない。
9. 正直な生活をしない。
10. 祝福師の祝福を受ける。
11. 教会の活動に積極的に参加する。
12. 賭事をせず、ゲームに興じない。
13. 教会の活動に積極的に参加する。
14. 負債はできるだけ早く返済する。
15. 政治に無関心であってはならない。
16. 破壊行為はクリスチアンの精神に反する。
17. 自殺をしない。
18. 事なかれ主義にならない。
19. 自由をはき違えない。
20. 離婚は利己主義の産物である。
21. 心と体の清さを保ち続ける。
22. 良書を読む。
23. アルコール飲料を生産しないようにする。
24. 陰謀はいけなない。
25. 偽りの証言をしない。
26. 専横に振る舞ってはいけない。
27. 仕事の能率を下げような行為をしてはならない。
28. 職場では全力を尽して仕事に励む。
29. 虚無思想に走ってはならない。
30. 自分の時間と才能と財産を王国の建設のために提供しない。
31. 聖文を研究しない。
32. 平和を保ちなさい。
33. 自由を守りなさい。
34. 罪人のために祈り、人を赦しなさい。
35. 奉仕はだれよりも喜んでしなさい。
36. 神のことをまず第一にしなさい。
37. 指導者の言葉に耳を傾けなさい。
38. 信頼される人になりなさい。
39. 証を述べなさい。
40. 伝道の精神を持ち続けなさい。
41. いつでもみたまを受けられる人でいなさい。
42. 愛の模範を人々に示しなさい。
43. 教会の定期刊行物(聖徒の道)を読みなさい。
44. 神のみ名を冒瀆してはならない。
45. 盗みをしてはならない。
46. 国の法律を守る。
47. 殺人をしてはならない。
48. 交通法規を守る。
49. 脱税行為をしてはならない。
50. 墮胎は殺人に次ぐ大罪である。
51. 婚前交渉は罪である。
52. ポルノを容認してはならない。
53. 性の解放運動は神のみこころに反している。
54. 性的倒錯行為は罪である。
55. 性的興奮に興じるものは罪である。
56. 婦女暴行は悪である。
57. 売春は罪である。
58. 社会価値を下落させるあらゆる不道徳な行為は罪である。
59. 不道徳を許容しない。
60. 姦淫を犯さない。
61. 肉欲を起こさない。
62. 誘惑から離れ、墮落から身を守りなさい。
63. 罪があるなら、早いうちに悔い改めなさい。
64. 同性愛は罪である。
65. 男は女装をすべきではない。
66. 女は男装をすべきではない。
67. 性転換は、主に対して償いをしなければならぬ。
68. 悪い雑誌を読んでほならない。
69. テレビやラジオの俗悪番組を見たり、聞いたりしない。
70. 同棲生活は罪である。
71. 精管切除手術を受け、神の計画をゆがめてはならない。
72. 自慰行為をしてはならない。
73. 汚れた言葉を用いてはならない。
74. 悲しんでいる人を慰めなさい。
75. 病人を見舞いなさい。
76. 貧しい人々に手を差し伸べなさい。
77. 納屋、物置き、垣根、部屋、家屋の美化運動を推し進める。
78. 家庭菜園をつくり、果樹を植える。
79. 貯蔵をする。水や食料だけでなく、知識、勇気、体力、信仰などのたくわえをする。
80. 殺生をしてはならない。
81. 高い教育と技術を身に付ける。
82. 知恵の言葉を守り、健康管理に注意する。
83. 収入内で生活し、借金をしない。
84. ものを大切に、無駄を少なくするようにする。
85. 自分の家を持つようにする。
86. 薬物を避けなさい。特に麻薬は人を廃人化する。
87. 時々断食をしなさい。
88. エネルギーを節約しなさい。
89. 家庭のタペを毎週開き、家庭を堅固にする。
90. 子供に労働の価値を教える。
91. 子供に責任感を抱かせる。子供を教育するのは親の責任である。
92. 両親を敬う。
93. 子供を信頼する。
94. 妻は夫に仕えなさい。
95. 女性は心を家庭に置きなさい。
96. 夫は妻を愛しいたわりなさい。
97. 永遠の伴侶を軽視してはならない。
98. 結婚生活を神聖なものとする。
99. 家庭に良い音楽を流す。
100. 主に楽器を奏するように教育しなさい。



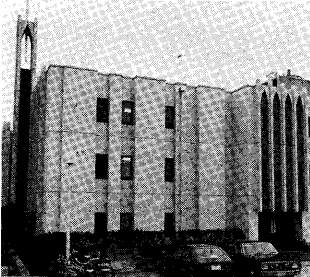
# 1980年!! 飛躍の年となる

## 東京神殿オープンハウス

1980年 9月11日—10月 8日

(担当) 神殿委員会委員長  
オープンハウス実行委員会委員長  
田中健治地区代表  
オープンハウス実行委員会副委員長  
浅間玄也日本横浜ステーキ部長

## 東京神殿献堂式



1980年10月27日 東京神殿

1980年10月28, 29日 日本東京ステーキ部センター

(担当) 神殿委員会委員長 田中健治地区代表  
神殿委員会副委員長 福田真日本東京ステーキ部長

神殿業務開始 11月第2週

神殿準備セミナーを  
開始しよう



## 系図大キャンペーン実施

(チャレンジ)

- ①個人の日記をつけ、家族の記録を作成する。
- ②人名抄出プログラムを実施する。

スポンサー・W・キンボール大管長の勧告より

# 日本地域のハイライト

## スポンサー・W・キンボール大管長来日予定！

東京神殿の献堂式，地域大会の管理のため，来日  
が予定されています。



## 日本地域大会，開催

東京大会：1980年10月30，31日 日本武道館

(担当) 地域大会実行委員長 田中健治地区代表

副委員長 神崎良太郎東京北ステークス部長



大阪大会：1980年11月1日 会場未定

(担当) 地域大会実行委員長 安芸 宏

副委員長 中村 晴兆大阪北ステークス部長

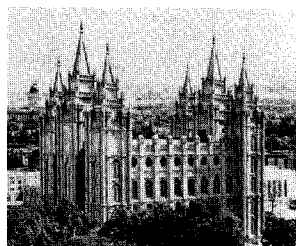
副委員長 市道喜八郎大阪ステークス部長

## 教会設立150年を祝う

1980年は教会設立150年に当たります。

各地において，記念行事が実施されます。

(担当) 150年祭実行委員長 渡辺驩兄弟



## 全国若人(SAP)大会

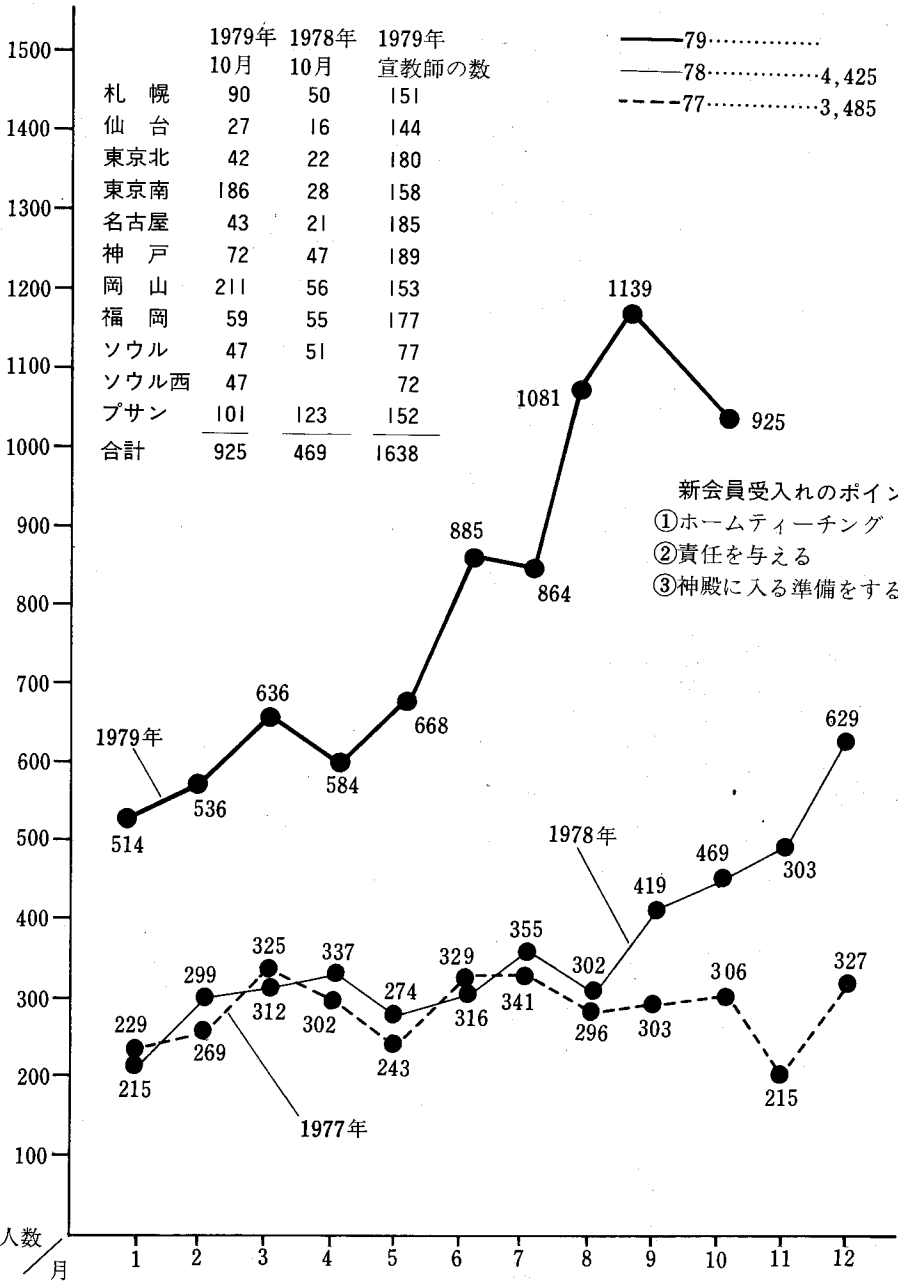
1980年8月6，7，8，9日

会場：ひるがの高原(岐阜県)

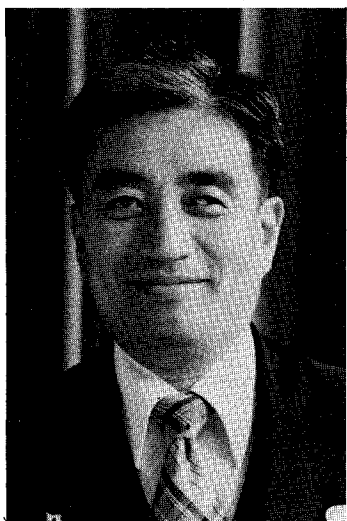
(担当) SAP全国大会実行委員会委員長

中村武史兄弟

# バプテスマ数







## 田中健治長老， 地区代表に召される

3年間の名古屋伝道部長を終えられた田中健治長老は、1979年11月1日、東京、東京北および横浜ステーキ部担当の地区代表として、更に神殿委員会委員長にも併せて召されました。東京神殿オープンハウス、献堂式、地域大会の準備を担当します。

なお、ふたりの御子息は、札幌および神戸伝道部で専任宣教師として活躍中です。



## 渡辺驩地区代表，解任される

これまで東京地区、台湾地区、大阪地区、名古屋地区等を担当し、ご指導下さいました渡辺驩地区代表の献身的な働きに心から感謝申し上げます。



柏倉仁地区代表は、新しく名古屋地区担当となり、札幌地区も従来通り担当します。



安芸宏地区代表は、従来通り、大阪地区、福岡地区を担当します。

